
スクール ダディー

青空鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スクール ダデー

【Nコード】

N0293S

【作者名】

青空鴉

【あらすじ】

普通に中学1年生として入ってきた 赤坂寿美代 だったが、普通ならボーっとして過ぎる入学式で、自分の父親を見つけてしまう、それも新しい先生としてマイクの前でしゃべっている自分の父親を！・・・それから、赤坂親子を巻き込む日常生活の中で、色々な出来事が起きる。それらのことを乗り越えて無事卒業できるのか？！

楽しい入学式（前書き）

二作品目の作品です。読みにくいことに変わりはありませんが、暇であるなら最後までお付き合いください。初連載ものなので、温かい目で見守ってください

楽しい入学式

父親って、どう思う？

ウザイって思う？

母親より好きって思う？

あんまりしゃべらないって思う？

それとも・・・

桜が咲き乱れて、散っていつている、そんな道を私は緊張やわくわく不安などの、なんだか不思議な感じで歩いていた・・・今日は中学１年生の入学式。私もはれて中学生デビューだ、この時は毎日楽しい３年間になると夢見ていた。でも違った・・・

晴れて中学生デビューをした私の名前は 赤坂 寿美代 少し昭和っぽい名前だけどなかなかおなじ名前のひとがいないということでも気に入っている、でも、問題なのは・・・

「おい！サカス！！赤坂サカス！」

そう、この苗字・・・このあだ名で呼ばれてかれこれ５年ほどたっている・・・そんな複雑な気持ちで迎えた入学式も終わろうとしていたさなかつた

「では、新しく入った先生を紹介します」

（新しく入る先生か・・・まあ、誰も知らないからみんなおなじ感じだけだな・・・）

そんなことを思いながら、体育館から少しだけ 見えている桜の木をボーッと眺めていたさなかつた

「小林先生・・・古木先生・・・赤坂先生・・・町田先生・・・
・ 苅崎先生・・・」

私はその名前にはっとした、なぜなら自分と同じ名前の先生がいたからだ

（私と同じ名前？・・・おんなじ名前の人くらいいるか・・・誰なんだろう？よく見えないな・・・）

よく見ようとしているといつの間にか新しく入った先生方の一人ひとりの挨拶になっていた

（このときよくみればいいんだ・・・あ！次だ）

真新しい背広を着てぎこちなくマイクに近づいていくその男性は、40代後半から50代後半くらいのおっさんだった

（おっさんだ！知らないな・・・このひと・・・見たことあるようなないような）

緊張しながらも、赤坂先生だという人はしゃべり始めた

「みなさん、おはようございます！」

「おはようございます・・・」

元気はいいとはいえない挨拶がちらほら聞こえた

「ええ・・・私は今日からこの東高間中学校で働かせていただきます、赤坂 友秀 といいます。担当は数学です、わからないことも多々ありますが、よろしくお願いします」

（パチパチパチパチ・・・）

会場に拍手がちらほらと上がった、ほとんどの人は『つかれた』とか『眠い』とか『最初のほうやってたけど、みんなもうやってないからやらなくていいかな』つという感じでやってない人が多いけどその中で一番凍りついたように動かなかった人がいる・・・私だった

疲れてもないし、眠くもない・・・だけど一ついえることがあった

『私はあの人を知っている』

知らないと思ってたあのおっさんを知っていたのだ、それだけなら別に知ってるな、で終わるのだが今は違う、状況が違う、なぜならあそこにたつて緊張しながら話しているおっさんは、紛れもない私の

『父親』だったからである

楽しい入学式（後書き）

これからも、書き続けていきたいと思います、できれば感想などを書いていってくれると嬉しいです。読みにくくてすみせん。これからも続けて読んでくれると嬉しいです

混乱・・・です・・・（前書き）

なんとか2話目も書きました、また読んでくれたりしてくれると嬉しいです。では読みにくいでしょうがお願いします

混乱・・・です・・・

桜が風に吹かれて散っているころ、私の心の中でも何かが壊れていた・・・

理由は明白にわかった、『自分の父親が自分が通っている学校にいる。しかも先生で』こんな常識はずれのことを自分におきるとは今朝、食パンを牛乳に浸して食べていたころの私は創造もつかなかったことだろう・・・つくわけもないが・・・そんなことを心の中で思っているともう、入学式は終わり、クラスのメンバー発表と担任の先生を発表することに移っていた

軽く混乱して足元がおぼつかない中で私はまだこんな希望を持っていた・・・（父親が先生でも、待ったに会わないんじゃないか・・・それに、父親のそっくりさんということもあるし、まだ本人の口から『あなたのお父さんだよ』とはいっていないんだし・・・）

そんなことを考えていたら人にぶつかってしまった

「わー!」

「ぎゃー!」

相手のほうも気づいていなかったらしく、もろに正面衝突をしてしまった

「すみません!」

（やつちゃったよ・・・考え事していてぶつかって、べた過ぎるし・・・相手の人大丈夫かな、最悪な一日だ）

ぶつかってからすぐにこんなことを考えて落ち込んでいる顔をしているにもかかわらず、ぶつかってしまった相手は

「こつちも見えてなかったんで・・・じゃあ・・・」

それだけいうとすぐ人ごみの中に消えていってしまった

（やばい・・・怒ってしまったのかも・・・つくづくついてないなあ・・・今日は）

さっきよりいっそう落ち込んだ顔をしていると先生の声が聞こえ

てきた

「はーい！クラス表は見たねー？そしたら担任の先生のところってね集合写真撮るから」

「集合写真？」

そう思っていると、あることに気づいた

（クラスの奴見てなかった！）

あわてて人ごみを掻き分けてクラスのところを見て自分の名前を探した

（赤坂・・・赤坂・・・赤！・・・間・・・じゃないよ）

案外早くは見つかった、なぜなら赤坂だから1番になってしまうのである

（3組ね・・・）

組はわかったので担任の先生に目をやろうとするとすぐ別のいかにも熱血っぽいジャージを来た先生が来て

「みつかったかい！？早く並ばないと！どこなんだい？組は？先生は誰だい？連れて行ってあげよう！！」

ものすごいほどの笑顔が私の顔をのぞいたので、一瞬と惑ってしまっただけだった

「どうしたんだ？！わからないのかい？？担任の先生は？？」

（それを今見ようと思ったんだよ？先生！）

心の中で叫んでいたが、相手には伝わらないので、声にやっと出した

「えつと・・・3組です・・・あ、赤坂です！」

心臓の音が聞こえたほどバクバクしていた・・・するとものすごい笑顔が校庭のほうを向き、左のほうを指差した

「なんだい？組みも担任の先生もわかってるじゃないか？あつちだよ！遅れてるからダッシュだぞ！！」

わかりやすいようにか？耳が割れそうな声で教えてくれたが、心の中では余計混乱していた

「あ、ありがとうございます・・・た！」

なぜか た だけが大きな声になってしまったことが少し恥ずかしかったがひとまず3組の場所に行って考えることにした

（・・・担任の先生わかつてるじゃないか？・・・名前しかいつてないんだけど・・・ま、まさか・・・）

顔色が自分でもわかるくらい変わった・・・最悪なことが的中してしまった・・・そう、担任の先生があのお父親？似の先生なのだ

（きのせい・・・気のせい・・・気のせい・・・）

暗示のように心の中で唱えていたらいつのまにか問題の先生の目の前に来ていたのであわてて人ごみの中に消えた

「はい！一列に並んでください！名前じゅんね！こっちが早いほうだよ！」

問題の先生は必死に生徒に呼びかけていた

「どうすれば・・・」

ついつい声に出してしまうほど混乱していた・・・するとある一人の子が声をかけてきた

「・・・ね、ねえ・・・赤坂さんだよな？」

混乱状態だったので、一瞬ボーとしてしまったがすぐに声がしたほうを見て、できる限り落ち着いた声で答えた

「うん！・・・そ、そうだよ？どうしたの？」

われながらおかしな声だったが、一応答えられた

「赤坂さん？・・・1番だよな？」

「え・・・あ！うん・・・」

「並ばないと・・・」

「あ！そっか！」

父親？似の先生に混乱されていたのだが、今は入学式が終わったときどきの新しいクラスメイトとの楽しいはずの集合写真なのだ
急いで人ごみを掻き分けて1番のところについた、ふと気づくとさっき教えてくれた子が向こうに行ってしまうのであわてて人ごみに飲まれながら声を送った

「・・・さ、さっきの子！・・・ありがとね！」

さっきの子は声に気づいたらしく、こっちを見ると少し微笑んで向こうに行ってしまった

（あの子是谁だったんだろう？名前見てなかったな・・・）
考えてみると、父親？似の先生に振り回されていたが楽しい中学校登校なのだ、今は父親？似の先生なんか忘れて楽しもう！

そう決めて改めて周りを見渡してみると知らない顔だらけだった
（・・・知らないな・・・西高野小の人は・・・いるが友達とは言えない人ばかりだな・・・しゃべったことがない）

そう見渡していて、改めて不安になってきた・・・楽しみにしていたが、やはりいざ来てみると本当に友達ができるのか不安になってしまう

（これは、先生なんかよりもっと大変そうだな）

そんなことを考えると少し余裕が出てきた・・・顔も少し和らいで血の気も戻ってきた・・・そんなときに父親？似の先生が大きな声を張り上げていった

「みなさん！記念すべき最初の中学生のメンバーです！しっかりと周りを見渡してみてください、知ってる顔もいるかもしれませんが半分以上が知らないはずですよ！！これからその人達とたくさんしゃべったりして、他人から友達にしてみてください！！・・・では写真撮影します！」

みんなが少しざわついていいるなかカメラマンらしき人がセツとしてすぐこちらを向いて笑顔で言った

「準備ができました！それじゃ、笑って！・・・いきますよ！・・・はい！」

パチッ！

一瞬静かになったのがまたすぐに騒ぎ出した

（どういう顔していいのかわからない・・・笑顔ってどうやってするんだったっけ？）

考えているとカメラマンさんが

「はい！2枚目いきますよ！笑って！！・・・はい！」

パチッ！

2枚目が撮り終わった・・・それからまもなくしてフリータイムになった一人でいるところになると

父親？ 似の先生が私に話しかけてきた

『ちよつといいかい？』

「は、はい・・・」

聞こえるくらい大きな音でつばを飲み込んでしまった・・・これで真実がわかると思うと、安心感もあったがそれより不安がこみ上げてきた・・・

父親？ 似の先生が私を呼んだのは屋上だった・・・それにはきれいな雲と、風が吹いていた・・・

混乱・・・です・・・（後書き）

2作品目です！読みづらいとは思いますが温かい眼で読んでいただいて嬉しいです！これからもどんどん書いていくのでよろしくお願いたします！またお読みください！！！！

やっぱり（前書き）

しばらく更新をしないでしまいました。すいません、暇があれば暖かい目で見てください。

やっぱり

屋上での出来事だった

「・・・話があるんだが、いいかい？」

「・・・はい」

すがすがしい空のはずが、緊張が張り詰めた空に変わっていた、私と父親？ 似の周りの空気が明らかに校庭のほうの空気とは違っていた

「あの・・・赤坂・・・先生？・・・な、なんですか？ 話して？」

「・・・わかつてると思うんだが・・・どうかな？」

校庭のほうに顔を向け父親？ 似は少しさびしそうな顔をして青空を見た

「・・・じゃあ、赤坂・・・先生は・・・私の・・・」

少し間が空いて時がすこしゆくつりになった感じになり父親？ 似は口を開いた

「・・・そう、『父親』だよ」

時が止まって、また動き始めた

「そうですか・・・やっぱり」

「ああ・・・じゃあ、覚えてたってことでいい・・・」

「何してるの？！ 突然帰ってきたら、先生なんて！ 馬鹿？ もう一回いうけど、馬鹿？！」

「ああ・・・ご、ごめんな」

少し驚いたようでこちらにむきなおしてまた口を開いた

「それでな・・・これからのことなんだが・・・どう説明するかな・・・」

私はそれを聞いてあきれてしまった、これからのこと？ それよりまずは・・・

「これまで！のことは？！」

心の中で思っていたことが口に出てしまった

「！・・・ああ！そうだな、話さないとな」

少し咳払いして襟を直し語り始めた・・・

「あれは、お前のお母さんと離婚してから、しばらくたったころのこと・・・」

いまさらだが緊張が襲っていることに気づき、もう一回ゆっくりと水分なんか全然ないくらいののどでつばを飲み込んだ

やっぱり（後書き）

今回も書き上げました！少し短くなってしまいましたが、読みにくさはまだあります。突然 離婚 といわれてもわからないと思いますが、それは次回わかりますので暇さえあれば見てください

今と過去（前書き）

4 話目です。なんとなくややこしいかもしれませんがお願いします！

今と過去

『あれは、お前のお母さんと離婚してからしばらくのころ・・・』

私の父親はポツリ、ポツリと語り始めた・・・

8、9年前

私の両親は私が幼稚園生のころに別れてしまった、そのころの私は無邪気でまだ悲しみも苦しみもつらさも何もわかっていなかった時期だと思う

そんな中にかすかにだけどはつきりと残っている記憶がある、それは運動会や公園での記憶誕生日などという楽しいものではない、また悲しいものでもない、この記憶は暗いものだった

暗いオレンジの光に包まれて両親が険しい顔で座っていた・・・私は先に眠っていたらしく、布団の中にいたが、母親が別の場所にいたせいで眠れず両親がいる部屋を障子の隙間からアンパンマンの絵本を持ってみていた

両親は言い争いをしていた、普段の穏やかで楽しい、両親にしたらものすごい変化で私も驚いた

小さな私でもさすがに入っではいけないと思ったらしく障子の隙間から盗み聞きをしていた

『そん・・・こ・・・ど・・・』

『なにが・・・どう・・・い・・・そ・・・は』

途切れ途切れにしか聞こえなかったし、今は言い争いの内容などは覚えていない・・・でも一つの言葉が私の中で今もしっかりと残っている

『寿美代が可愛そうだろ!!』

それが私の何かを変えた一言であつたといつても嘘ではないかもしれない

今

私は静かに父の話に耳を傾けていた・・・
離婚してから一人で住んでいたこと、あのときは後悔してること、・・・色々話してくれた

父は話しているときも絶対に私の目は見なかった

私は知らなかったことがわかっていくことと、そんなことがあったということではやはり混乱していた

父はしばらく話すと、一瞬静かになり、私のほうに向いてこういった

「これが・・・コレまでのことだよ」

父は深刻に静かにそういった

「そっか・・・」

やっと出た言葉がそれだった

「ああ・・・」

父も私が混乱しているのがわかつたらしくしばらく黙っていてくれた

でも何か言いたそうな顔もしていた

「・・・なにかまだあるの？」

私は切り出してみた

「・・・ああ・・・混乱していると思うが聴いてくれるかい？」

「うん」

今回もまたつばを飲み込んだ、もちろん聞こえるくらいの音で

「・・・お父さんがここに来た理由はな」

一番知りたかったことが聞けるとなるとまた緊張してしまった、
父は低い声でいった

『・・・お父さん、マフィアのボスなんだ』

「は？」

あまりにもわからないことだったのでとっさに出てしまった

「わからないと思うが、わかってくれ」

申し訳なさそうに言っているが、わかるはずなどない

「・・・えっと？」

「いや・・・その・・・」

困っているのもわかるが、私も困っている

「・・・マフィアの・・・？」

「ボス」

「なるほどー・・・」

われながら怖い笑顔で固まっていることに気づいた

「わからないと思うが続きがあるんだ、聞いてくれ」

「う・・・うん」

まだあるのか・・・と一瞬あきれてしまった

「お父さん、ボスだったのはいいんだけど色々あってな・・・

マフィアから命を狙われることになったんだ」

（なるほど、そうですか）ツトという人がいるはずがない余計混乱してしまった

「・・・わからないと思うが」

（そのとおりわからないです）っと心で叫んでしまった。そのときだった

「お願いだ・・・お父さんを学校においてくれないか？・・・

いや、おいてください」

父は・・・屋上のアスファルトの上で、深々と土下座をした

「！・・・な、なにやってるのさ？！ちよつと！」

こんな父を見たことがないし、見たくもない！

「お願いだ！」

何も納得していなかったがこんな父を見るのもいやだったのもあ

るので

「・・・わかったよ、だから土下座なんかしないでよ」

「本当か?! ありがとうな! 寿美代!」

本当に喜んでいた、父親が土下座してから親にほしいものを買ってもらった子供のように喜ぶ姿を見たことがあるだろうか?・・・みんな　ない　と答えると思う

「じゃあ、このことは絶対秘密だからね?」

「ああ!」

二人とも笑顔になって何かが吹っ切れた感じがした
いつの間にか暖かい風が吹いていた

そしてついに、緊張が全部解け

「あははっははは!」

「ぷ・・・あっはっは!」

二人は屋上でそりや見事なほど大笑いをした

それからしばらくたわいもない雑談や思い出話に花を咲かせていた
こんなときが続けば・・・そんな願いも少しあった、でもそれは
すぐ壊れてしまった

なぜ?

それは・・・

ここは学校でしかも入学式が終わったばかりで、ここにいるのが
新入生と新しい先生だからである

キンコンカーンコン

チャイムが鳴り、二人があわてて下に下りて言ったのもうお分
かりでしょう

「もうこんな時間なのか?!」

「やばい、先生にしかられ・・・隣にいた!」

二人がこのあと先生に怒られたのは目に見えていた

・ こんなことで赤坂親子の波乱万丈な日常が始まっていくのですた
・

今と過去（後書き）

長ったらしくなってますいません・・・また温かい目で見ていただけると嬉しいです

新しい仲間達（前書き）

5話目です、余計読みづらくなったりしますが、またまた温かい目で見てください！

新しい仲間達

昨日の入学式では色々大変なことばかりで一生の出来事になりそうな一日だった

自分の学校にマフィアのボスでしかも命を狙われている父親の先生がいるなんていうことがおきたらたぶんあっさりとは受け入れられないッ思う。そのとおりでしばらくは混乱が続くと思う、それから困ったこともあった

自分の家族に父親のことを話せないこと、特に母親に

父親のことが胸の辺りにひっかかって、なんだかきまづかったことも確かであった

中学1年生 自己紹介

今日はみなそれぞれ自己紹介をやって 自分のクラスメイトを知ろう！ 見たいな感じの学活の日であった

私は1番なので何を話そうか目が回るくらいどきどきしていた
大体1番だとみんながよく見るし、自己紹介の仕方があやふやな子は私の仕方を基準にやるので余計プレッシャーと緊張で押しつぶされそうになる

まずは問題の私の父親先生（赤坂先生）の自己紹介からだった

黒板の前の教壇に立った父親先生はみんなをある程度見渡すと真正面を見てにつこりと笑顔になり、大きな声でしっかりといい始めた

『先生の名前は 赤坂 友秀 といいます。まだまだ新米ですからみなさんと一緒に成長していきたいと思います。担当教科は数学 です。よろしく願います！！』

わああああ！つと歓声が起こった、そんなかで私はどう反応していいのかわからなかったので、とりあえず拍手を試してみた
すると父親先生は、大きな声で

『では、質問がある人？大きく手を上げて！』
すると手を挙げずにある一人の男子から

「歳はいくつですかあ！」

つと声が上がった、父親先生はその質問に笑顔に答え

「元気がいいね、でも今度からは手を上げてくれるといいな。
先生の歳か、いくつにみえるかな？」

あちこちら

「50！」 「52？」 「違つて、48！」

などという声が上がった

「はっはっは！惜しいところもいつてるな」

「54！」

「うゝんちよつと違うな」

「52？」

「離れたな」

「57！」

「もうちょいか」

「58！」

「もう少し！」

「59！」

「惜しい！」

「わかった！60！！」

「正解！」

あちらこちらから、えゝ？ マジで？ 還暦！ みえなーい！

おっさんだな などの色々な声が上がった

「先生は60歳でした。では、ほかに質問ある人？」

今度はさっき言った男子が勢いよく手を上げ冗談顔で

「先生は結婚してるんですかあー？」

この質問に私はなぜかきになってしまった、そして父親先生の事
を見てしまった。とても心配になってしまった

父親先生は少し考えてまた笑顔で

「先生は結婚をしていません、独身です」

クラスは盛り上がった。でも私はあまり盛り上がれなかった、なぜか複雑な気持ちが出てしまった

「先生独身ジャン！早く結婚しなよ！」

「はは！そうだな」

そんな風に笑っている父親先生は時計をみて

「それじゃ、出席番号順に自己紹介してもらおうか」

えーっとみんなが一斉に言った

「1番の人から」

（そ、そういえば1番私だ！・・・な、何にも考えてない・・・やばい）

そんなことを考えながら席からたって黒板の前に立った、みんな視線が痛いほどわかる

「えー・・・名前は 赤坂 寿美代 です、出身校は西高野小学校で、部活は演劇部に入りたいです！・・・変な性格かもしれませんが、1年間よろしくお願いします！」

ぱちぱちパチと拍手があがった その中から出てきた言葉が

「よっ！赤坂先生の娘さん！」

どっ！ツト笑いが起こった

「違っよ！」

と、笑いながら否定したが心の中では（あながち間違っただけ・・・やばい）っと少しあせったこともあった

「じゃあ、どんどん自己紹介して言ってね」

「わたしは・・・」

みんなが次々と自己紹介していくなか私は緊張でぶっ倒れそうだった

これからこのクラスでやっていけるか、そもそも秘密がばれないだろうか

クラスに溶け込んで普通に笑っていられる父親先生が一瞬うらやましくも思えた

新しい仲間達（後書き）

またまた読みにくいかもしれませんが、読んでください。変な点やコレ何？っという点がある場合感想に乗せてどしどし聞いてくださ
い

仮入部 パート1 (前書き)

今回もややこしいかもしれませんが、そこらへんは温かい目で見てくださいと嬉しいです！・・・多少、気になる点もあるかもしれませんが読んでください

仮入部 パート1

今日は、自己紹介もすんでしまつて、何日かが過ぎていきクラスもなんとなく雰囲気がつかめてきて徐々に新しいこともしゃべれるくらいになつてきたところだった。そんなか父親（赤坂）先生は大きな声を張り上げて

「はい！聞いてください！」

するとみんなはまさに、お父さんがこれから真剣な話を話すときみたいに静まり返つた

「・・・はい、今日の放課後から 仮入部 が始まります。皆さんは行きたい部活は決まつてますか？この1週間で自分にあつた部活を決めてくださいね・・・では日直」

少し周りがざわつくと日直が

「起立！きょうつけ！・・・礼！」

「さよーならー」

元気よくみんなが挨拶をすると仲が良くなつた子同士が集まつたりして、仮入部にいつていった・・・そんなか父親先生も荷物をまとめて職員室かどこかに行つてしまつた

「・・・どうするかな？」

私はまつたくと、いつていいほど部活に興味がありませんかつた。

かといつて、帰宅部では後々困るだろうし楽しくない気がする・・・つとということで、運動部はきつくて苦手だったので文化部で友達にも『きてみなよ！私はそこいくから！ねえ！寿美代も迷つたらきてよ！』つといわれていたことを思い出して

「迷つてるからいこつかなあ・・・よし！いこう！」

つとということで、私は演劇部に向かうことにした・・・そこにはほかの新生と先輩？らしき人達が集まつていた。すると・・・

「寿美代~~~~~！」

向こう側から私に気づいて、走ってくる子が見えた

「あ！・・・マイマイ？」

するとその子は

「そうだよ！忘れちゃったの？ひどいよ！寿美代・・・」

「いや！忘れたんじゃないよ・・・一時的に記憶がすっぽ抜けただけで・・・」

「そういうのを 忘れた っていうんじゃないの？サカス」

「誰がサカスだよ！・・・って寺屋！」

「おいっす！・・・あははは！」

「何言ってるの！実加！」

「あははは！」

この陽気で少し不思議な二人は、私を演劇部に誘ってくれた友達。

「遅いよ！待ってたのにさ」

「ごめんごめん」

そんな会話をしていると、部室らしき部屋のドアが

ガラッ！

「あ！あいた！」

一気に先輩達が、流れ込んでいって、部長らしき人が

「みなさん！入ってください！」

すると新入生がこれまた一気に流れ込んで言った

「うわ！結構いるね」

「どうなるかな？これから？」

「さあ？」

そして部長らしき人が、みんなに向かって

「はい！みなさん、一つの円になってください・・・そこも広がって！」

そして大きな一つの円ができた、ちょうど真つ二つに先輩と新入生とで別れていた

「それでは、これから自己紹介してもらいます！・・・その君から時計回りにね」

さされた子は静かに緊張したようにうなずいた

いよいよ仮入部が始まると思うと改めて緊張してしまった・・・
これからやっていけるのだろうか？この部活で・・・

仮入部 パート1 (後書き)

今回はまた多くなりそうだったので、パート1として書かせていただきました。パート2も早めに更新するので、その場合はまた読んでいただけると嬉しいです

仮入部 パート2（前書き）

パート2を更新します、また温かい目で見てください。ややこしいですがお願いします

仮入部 パート2

仮入部期間中にいくところがあったので友達に誘われた演劇部に行くことにした。そこで、自己紹介が行われようとしていた

「では、右の子から！」

心臓がまたバクバクと聞こえるくらいなっていた、一番最初の子が自己紹介を始めた

「はい！僕は！桂 空也 といいます！久那架小学校出身で、なんで、演劇部に入ろうと思ったかというと、僕は劇団四季とかが好きで、興味があつたので入ろうと思いました」

（なんだか、落語とかそういうのが好きそうで、一番練習とか一生懸命にしそうだな・・・ット思ってしまった）

「ありがとうございます」

現演劇部員から挨拶がかえってきた

『次の子に移った』

「・・・大町 栄太 といいます。下中小学校出身で、この部活に入ろうと思ったのは・・・親も進めていたし、少し興味もあったので入ろうと思いました・・・よろしく願います」

（この子はなんだか癒し系で座敷童子っぽい子だなと思ってしまった）

『次の子』

「俺は、渡邊 海斗 といいます。出身は・・・西高野小学校

です、理由は、あ、演劇部に入ろうと思った理由は・・・なんか面白そうだったからです。・・・これからよろしくおねがしまーす」

（元気そうな子でたぶんムードメーカーみたいな存在なんだろう
と思っってしまった）

『次の子』

「はい、・・・俺は・・・甲賀 樹 ですっ・・・えーと・・・
出身の学校は、西高野小です！・・・よろしくお願いします」

（小柄でなんだか不思議な子だなあ・・・この二人は、おんなじ
小学校だったんだ。）

『次の子』

「えっと・・・寺屋 実加 です・・・西高野小出身です。演
劇部に入ろうと思った理由は、興味があるのがこの部活だけしかな
かったからです。よろしくお願いします」

『次の子』

「名前は、原林 舞南 です。西高野小学校出身です。演劇部
に入ろうと思った理由は・・・前から興味があつたので入ろうと思
いました。これからよろしくお願いします」

『次の子』

ついに私の番が来てしまった、緊張してあまり、声はうまく出な
いが、自己紹介をした

「・・・赤坂 寿美代 っといいます。西高野小学校出身で、演劇部に入ろうと思った理由は、運動部とかは苦手だったので、興味があつた演劇部にしようと思いました・・・よろしくお願いいたします！」

なんとか言い切れた・・・ここまで緊張の連続だとは思わなかった

「・・・はい！コレで全員かな？・・・じゃあ、次は顧問の先生を・・・あれ？」

すると先輩達がざわついて、「あれ？」「またいないね」「あごがない」「レアポケモンだモンな」

（いや、ポケモン？あご？先生がぼろくそにいわれてる・・・）しばらくすると部室のドアから、急ぎ足のまま背が高く、おじさんで、めがねをかけていて・・・あだ名らしきものからまして、あごが出ている・・・

「いや・・・すまん、遅れた」

「では、顧問の先生の紹介です」

すると顧問の先生は、みんなのほうを見て

「はい、私が、演劇部の顧問をやっている、高橋 勝雄 です、まあ１年生も顔を覚えてくれると嬉しいんだけど、それからこの部活はとても陽気な部活なので、楽しんでいただけたらと思うんだけど、じっくり考えた上で選んでくださいね、この部活のほかに・・・サッカー部。バトミントン。卓球。とかね、だから演劇部だけじゃないくていいからね、よく考えてね」

「先生、それじゃあ、演劇部に入らなくなっちゃうじゃないですか！」

部員が先生にいった

するとみんなが笑った、少しだけ緊張が解けた

部長がしつかりとまじめな顔で

「では、これで自己紹介は終わりました、僕たち2、3年生の自己紹介は本入部のときにいいます・・・それで・・・」

「ちよつと待て、私のほかにもう一人、顧問がつくはずなんだが、・・・きてないな？」

「もう一人？」

「顧問に？」

「先生が？」

「来る??」

一人の部員が万遍の笑みでガツポーズをしていた

（そんなにいやな先生なのか?・・・冗談か?）

そんなことを考えてくると、いやな創造が頭に浮かんできた・・・

（まさか・・・あの先生ではないよな・・・まさかねえ・・・

そこまで神様は私を見捨ててはいない・・・）

「すいません！遅れました！」

（見捨ててたあ!!）

勢いよく駆け込んできた、ジャージ姿の先生はあわてていたようで、上のジャージのチャックが閉まりきっていない

「いや・・・慣れていない背広から着替えようと思ったたら、意外に時間がかかってしまいました・・・すいません」

「ああ！赤坂親子がそろつてる！」

渡邊がそういったとたんに、みんなが笑い出した

（こりやまた、あだ名が増えそうだ・・・）

「違うって！」

そう、笑顔で否定しながら少しだけ父親先生のほうを見ると、すまん とジェスチャーしている父親先生が見えた

（そう思うなら、なぜ来た!）心の中で叫んでしまった

「はい、ということで赤坂先生がもう一人の演劇部の顧問です。じゃあ、自己紹介を」

「はい・・・遅れてしまつてすいませんでした!・・・演劇部

の顧問になりました 赤坂 友秀です！まだはいりたてで右も左もわかりませんが、よろしく願います」

ぱちぱちと拍手があがった

「・・・今度こそ大丈夫ですね？」

高橋先生がうなずいた

「・・・では！コレで終わります！・・・時間が来てしまった。今日の仮入部はこれで終わります、1年生は仮入部カードを書いて！終わりにします・・・」

先輩方がきょうつけをしたので私もそうした

「反省会はいいいね・・・きょうつけ！礼！」

「ありがとうございますあー！」

みんなが一斉に言って、そしていっせいに帰りだした
色々としやべりながら後ろで高橋先生と父親先生が

「はい！窓を確認にしていってね！気をつけて帰りなさい！」
といていた。

演劇部の部室は、第2音楽室というところで、4階建ての校舎のなかで3階の一番はじっこにある、すぐ隣にトイレがあり、壁ぞいに曲がるまで窓がある、しばらくいくと家庭部が使っている、家庭科室と調理室がある・・・それから曲がり角を曲がると階段がありそこから降りるようになってい

という感じのところである、

（これからどうなっていくんだろう？なんでよりにもよって父親先生が・・・最悪だ・・・）

そんなブルーな気持ちになって帰っていく私だった、仮入部1日目。

仮入部 パート2（後書き）

やはり長くなってしまいました。これからも仮入部のことを書いていくつもりなので、パート3、4、となってしまうかもしれません
がまた読んでください！

ちよつと番外編♪（前書き）

本格的な話は、パソコンが耐えられないので今回は省略させていただきます。温かい目をお願いします。

ちよつと番外編♪

番外編 父親日記

放課後に父親（赤坂）先生が自分の机に何かごそごそとさぐって
いた

（またなにか変なことでも、やり始めるのか？・・・はあ・・・
）

父親先生は机の一番奥に太くてがっしりしている腕を突っ込んで
なにやらノートらしきものを摘み出した

（ノ、ノート？？なにをしだすんだか）

するといきなりその謎のノートを持ったまま、ドアに走ってきた
私はドアからのぞいていたので

（こつちに来る？！やばい！）

っと思つた瞬間に全速力の父親先生と正面衝突してしまつた

「いたあ！」

「ぐはああ！」

どさっ！

勢いよく転んでしまつた

「いたたたた・・・」

「まったく、盗み見デモしてたのか、はやく帰りなさい。もう、
学校はおわつた・・・ん？寿美代じゃないか！」

「そうだよ、何してるの？ノートなんか出して、袖ほこりまみ
れだけど」

「！本当だ！っというかそこまで見てたのか？悪い癖だなあ、
盗み見なんて」

「うるさいわあ！・・・で、なんなの？そのノート」

ぽんぽんとまだ真新しい制服をはたきながら立ち上がっていった

「ああ！これか！それはだな・・・ふふふ！」

父親先生もこれまた、もう完全に袖は汚れているジャージをもろともせず立ち上がった

「これはだな・・・『1-3日記パート1!!』だ!」

「はい?」

「いや、だから、『1-3日記パート1』・・・」

「簡単に言うと?」

「先生と1-3のみんなの交換日記!」

「そんなのやろうとしてんの?!」

「先生は、みんなと成長していきたいからな、いわば肥料化水だな!あはははは!」

「大丈夫?1-3って、一見平凡だけどけっこうすごいクラスなんだってみんな噂してたよ」

「そうか・・・」

父親先生は一回大きくうなずくと乗り気じゃない私を見て

「まだ、成長段階だからな、これから成長していけばいいんだよ」

父親先生は時々妙なほど自信満々に言葉を言う。でもその言葉には変に説得力があつて、なんだか心があるみたいな・・・言葉に心があるなんていうのは変だけどそんな気がしてしまう。

「さあーて!明日みんなに言おうな!どんな反応するかな?みんな!」

そんなふうにする気になつてゐる父親先生・・・いや、私の父は少しだけ1-3をこの学校全体を変えてくれるようないきさつがあるように感じてしまいました・・・

ちよつと番外編♪（後書き）

小さく小さくと、思っていたのですが、結局長くなってしまい・・・
申し訳ないです・・・本編のほうも見ていただけると嬉しい限りで
す

仮入部パート3（前書き）

パソコンの調子が急に良くなったんで、今すぐに更新します！またまた温かい目で見てください。では、長くなってしまふと思います
がお願いします！

仮入部パート3

今日も、仮入部の日だった。本当なら、（別の部活も言ってみようかなあ・・・）とおもふのだが、一週間くらいはこの演劇部にいて、本入部の覚悟を決めたら別の部活へいこうと決めていたのだ。

「今日もまた父親先生かあ・・・」

独り言をポツリとつぶやいてしまふのが私の癖でもあった

「なーに、いつてるの！寿美代！」

「うええ！？・・・マイマイかあ・・・」

「私じゃ残念なの？ひどいよ」

「ごめんごめん」

（びつくりした・・・聞かれるとまずいな・・・心の中でつぶやかないと）

「・・・父親」

「えええ！？いや、違うんだよ！これには、ね！そのあれですよ！」

「なに、あわててるの？サカス？父親の話をしようと思っただけなんだけど」

「え？・・・なんだあ、心臓壊れるかと思った」

びつくりした、父親っていうのを聞くだけで心臓が壊れるくらいバクバクする・・・これがトラウマか

「もしかしてサカス、父親がコンプレックスとか？」

「私も、お父さんは苦手かも」

「あー、わかる！それ！」

トラウマだよ・・・その話題は盛り上がりたくない・・・すると突然後ろから

「赤坂、括弧娘！」

きました！男子のからかい君！・・・いつもどおり対処しよう

「赤坂 娘はいらないって！」

「でも、親子にしか見えないんだけどな！」

「うるせつ！それはお前の目がおかしいんだよ」

大体の男子がからかうんだが、一応男子の名前を紹介

「赤坂 括弧娘！」

あだ名を製造し、大声で冷やかす、一見スポーツマンらしい男子、
渡邊

「赤坂って名前はそういないだろうから、呼ばれてもしょうがないだろ、サカス」

冷静に淡々とでもはつきりからかう、小柄で、ポケットが筆箱ついている男子、甲賀

「顔もどことなくにてるぞ、赤坂娘！ウィー！」

劇団四季が本当に好きだった、お堅いけど少し周りとは違う男子、
桂

「顔がもう、妖怪だから、似てるなら赤坂先生も妖怪だぞ」

軽いSな体質な、癒し系だと思う、女子に間違われたこともある
という男子、大町

ツト言う感じである

「いいたいほうだいいいやがつて！何回いえばいい？私は、赤坂！娘じゃない！赤坂なんでさらにいるわ！人間！」

何回いつてもわからない奴らだ、まあ面白いから意外にいいんだが・・・こういう考えを持ってしまうので私は・・・

「でも、サカスやられても笑ってるから、ドMだろ？」

「確かニー」「笑ってる！」「こらこら嬉しいがるな！」

「テルが泣くぞ！」

コレで気になる点があるでしょう、そうなんです・・・私、元彼がいました（涙）こんなことを小説に書くのもなんですが・・・そういう感じで別れましたが、今でもいじられっぱなしです

「だーかーら、なんでそこで、川崎が出て来るんだよ？バカか！それと、Mじゃない！宣言できる」

「嘘だー」「嘘ついた」「どっからどうみても、Mじゃん」
「うん、確かに、私も思う」

また、そんなことをいって・・・これだから川崎とは別れ・・・
ん？私？・・・

「なんでちゃっかり、マイマイも共感してんの・・・」

「あ！ごめん！でも、思っちゃったんだ」

「私も同じく！右に！」

「右に同じくね・・・じゃなくて！フォローしよう？味方はいないのか！」

「いない」だろ、よ、でしょ、いない、って、逆に聞くが
と思ったのか？

全員一致でした

「こんなに裏切るの！悪いことした？こんなに敵だらけ！心が
痛い・・・」

いつもこんな感じだった

「心を一つに！」

「変に意気投合するな！」

つとこんな感じで、仮入部はどんどん過ぎていき、結局ずっと演
劇部にいつてしまいました、ですが、前の自己紹介のときいた人達
はみんな私と同じく演劇部に通っていたようですが、もちろん紹介
してなかったって、ほかにもたくさん来ていました・・・それから日
にちは過ぎていき本入部の日になりました・・・

仮入部パート3（後書き）

今回も読みにくい＆長い＆台詞だらけです・・・すみません、やつと仮入部の話はおわりますので、ご意見などありましたら気軽に感想をください！知らない人大歓迎です！

本入部！！（前書き）

今回もくだらない台詞なども多々あるでしょうが、ご了承ください。
やっと部活で一区切りできるのでまた温かい目をお願いします！

本入部！！

今日はいつもとは違う雰囲気で部室につながる階段を上っていた・
・

（緊張するなあ・・・結局演劇部しかいなかったなあ、部活心残りはないけども・・・）

部室の前にはもう数人集まっていた。
ドサツ！

いつもどおりのなぜか決まった定位置にバッグを置いた

（ふうー・・・改めて緊張・・・）

先にいる男子は顔見知り・・・っというか勝手に自己紹介をしてしまった男子達だった

（みんな本入部カード持つてる・・・はいるんだなあ）

（男子達とやっていけるのかな？）っとな不安になってしまった、するとそこに

「寿美代ー！！」

向こう側からマイマイが走ってきた、手には、本入部カードを持っていた

「マイマイ！おはよう」

「こんにちわじゃないの？もう午後だけど？」

「いいの、いいの」

「そう、いいんだよー！グリーンだよ！」

どこから声がしたかと思うと、寺屋が芸能人のまねをしながらトイレから出てきた

「うわ！寺屋いつのまに？」

「ちよつと前から」

「なるほど・・・」

そんなこんなでわいわいやっている、父親先生（赤坂先生）が部室の鍵を持って部長と一緒に来た

早足できて、部室のドアを開けると一斉に生徒が流れ込んだ

大体私は、一番最後らへんに、人がすいてから入る

「寿美代、ドア閉めて」

「あ、うん」

私はドアに手をかけてひっぱたのだが、ゆっくりと明らかに引きずっているような音を立ててドアが閉まった

（そういえば、ドア壊れてるんだよね・・・どこもかしこも壊れてるなあ・・・）

部長が中央に立つて、みんなに何か言った

「はい！みなさん！集まってください」

みんながそろそろと集まってきた

「・・・はい、コレで全員ですかね？」

言った瞬間壊れかけているあのドアが開き2年生らしい女子の先輩がかけこんできた

「ごめん、遅れた・・・みんなならジャッてる！」

「遅刻だぞー」

「うるさい！」

そういいながら、2年生の場所に入った

「・・・そろいましたね？じゃ、はじめ・・・」

「待つてください！まだ高橋先生がきてないですよ！もうちょっと待つてくださいね」

父親先生はいった

ざわざわした瞬間だった、意外に早く来たいつものように風のよな感じで入ってきた

「待たしたな、いいよ、やって」

部長は確認するとみんなのほうを向いていい始めた

「はい。改めて演劇部へようこそ。私は部長の、沼南 幸太といいます。これからよろしくお願いします。ここにいる皆さんは演劇部に本入部としてみていいですね？」

「はい」

何人かが小さい声で答えた

「それではこれからあなたがたの先輩に当たる人達の自己紹介をします。今は無理かもしれないけれどできるだけ名前をおぼえてくださいね」

「はい」

（今の部長さんは知的で完璧な感じがする人だなあ・・・まさに部長っぽい）

「それでは2年生からね・・・」

そういつて、緊張の先輩自己紹介が始まった

本人部！！（後書き）

すいません・・・これで部活の話人くくりのつもりでしたが、長々となってしまう・・・読みにくいでしょうがお願いします

先輩方登場！（前書き）

今回では先輩方の自己紹介をやらさせていただきます。たくさんいますが、どうか、暖かい目をお願いします

先輩方登場！

部室がいつもの和やかというか気の抜けたというか、とにかく柔らかい感じではなくなったのがわかった

（ごくっ！・・・つばを飲むのにも音がしちゃだめな感じがして・・・緊張）

そんなぴりぴりとした空気の中、部長さんだけはたぶんいつもの笑顔らしきものを浮かべて、こういった

「では、2年生から・・・誰からいこうか」

すると、さつき遅刻してきた2年生の女子が

「山上がいいとおもいまーす！」

ツト元気よく発言した

「なんでだよ！」

きつと山上先輩なんであろう男子の先輩が反論した

「ここでいっとなげば、印象が根付くぞー！いけ！・・・そして悪い印象を根付かせろ」

「ひどいつ！また、香川先輩が毒を・・・」

「なんかいったかー？山上ー」

「ひいひいひい・・・」

おそらく、名札の色からして3年生なのだろう、先輩と指名された先輩の会話が続いた

●ここで解説をしておく、ここ、東高間中学校では、生徒は苗字がかいてある名札をつけている。今年は1年生が黄色（すなわち私達の学年が黄色学年と呼ばれている）2年生が青色（青色学年）3年生が緑色（緑学年）つというわけで、名札さえ見れば何年生で苗字はナンなのかがわかるのである

本編に戻って・・・そんな会話の中に部長さんのしっかりとした声が響いた

「はい、山上と香川おちついて、しょうがないから山上からす

ればいいんじゃないか？」

「ええー！？なんでそうなるんですか！だいたい指名したこいつがやればすむこと・・・」

「山上、2年生で先輩なんだからちゃんとけじめをつけなきゃな」

「高橋先生までも？！」

高橋先生は笑っていった

「いいじゃないか？山上君。別に自分だけなわけじゃないんだから、順番が早まったただだよ」

父親先生（赤坂先生）は山上先輩らしき人に語りかけた、すると観念したように前を向いてしゃべり始めた

「はい・・・えつと、2・2の山上 三波 です。特技とかは・・・まあ絵を描くのが好きです！よろしくお願いします（・・・）

／

拍手があがった

（アニメっぽい声だな・・・おそらくムードメーカー的存在なのだろう・・・2年生では男子がこの先輩しかいないんだな）

次にはあの遅刻してきた女子の先輩だった

「えつと・・・なんだつけ・・・あ！そうだ！あははは・・・」

「何で急に笑い出すんだよ？！」

（同じくです）

「あははは・・・2・2組の菊間 夏菜 です！特技は・・・ないですね。よろしくお願いします」

（ふ、不思議な先輩だ・・・でもなんだか後輩と一番なじんでるなあ）

『次』

「名前は、吉田 野月 です。好きなことは、歌を聴いたりすることです、よろしくお願いします！」

（自分だっていえないけれど・・・背が小さいんだな・・・私のほうがまだ負けてるけど・・・144センチ以上。か、明るい先

輩だ)

『次』

「はい！私の名前は藤木 珠江 です！特技は・・・ないなあ・・・好きなものも特に・・・しいて言うなら小説とか台本とかを読んだり書いたりするのが好きです！よろしく願います！！」

（きつとこの人は芯が固い人だ。絶対そうだ、難しい人ではないかもしれないけれど・・・でも楽しそうな先輩だな）

『次』

「はい！ありがとうございました。次は3年生からいってください・・・香川から願います」

そういうと香川先輩だという人が口を開いた

「・・・香川 智之つといいます。副部長をやらしてもらってます、特技は・・・山上いじめかな？（笑）」

「ひいひい！香川先輩に殺される！」

（あ・・・ここにもいた、DS・・・生きていけるかな。まあDSはともかく、副部長さんが、怖いけどがんばろう！）

『次』

「はい、柿谷 和義 です。特技はね、ものまねかな？よろしく願います」

「ここで一回モノまねを！」

ヒューヒュー 部室が一気に盛り上がった

「いずれね！いずれやるときがきたらね！やりましょう。はい次」

「ブーブー」

山上先輩がブーイングをやると

「山上、お前にもモノまねさせてやろうか？」

「な、なんのですか？」

香川先輩はにつこりと微笑むと

「死体のな！」

「静かにします！すいませんしたっ！」

香川先輩は落ち着いたようだった

（本物のドSがいるよ！）

『次』

「杉松 界 です！特技は！踊ったり、歌ったりすることです！よろしく願います！」

（背がとても高い先輩だなあ、そのわりには声が高いんだな、人ごみとかで真っ先に見つけられるタイプだな、うん）

『次』

「江成 沙希 です。この中では女子が一人なんですけど、特技・・・は、山上とかぶってしまいうんですが絵を描くことです。よろしく願います」

（本物の声優みたいだ！女子が一人なんだ、アニメ声だなあ・・・すごいなあ・・・なんだかお姉さんって感じがするな）

部長はあたりを見渡すとしっかりとした声で言った

「コレで全員ですね・・・では！」

そこに小さい声で先輩方がしゃべった

「あいつはいいの？新森・・・」

「いいでしょ、きてないんだから」

そんな声が飛び交った。そんななかで部長さんはまるで気づいていないかのように話を続けた

「・・・全員終わったことなので、終わりにしましょう。今日はコレだけで時間がたってしまいました。明日から1週間はいろいろな事情で部活がありません。なので1週間後に会いましょう」

はい。っと声が上がった

『最終下校まで後5分です。校舎の中に残っている人はすぐに外に出てください、くりかえします・・・』

校内放送が入った

「はい、じゃあ気をつけ！礼！」

「ありがとうございますー！」

みんながいつせいに外に出て行く中だった

「寿美代、ちよつと話が・・・」

「赤坂先生、早く帰らないと」

（なぜこんなに私の父親は秘密を守れないのだろう・・・寿美代なんて名前で呼んだら不思議に思われるに決まってる・・・気づいてくれたらいいんだけど）

「ああ、そうだな・・・でも寿美代明日・・・」

「先生！」

（名前まだ気づいてないのか！）

「寿美代・・・」

「・・・名前、赤坂なんですけど・・・」

（これで気づくだろう）

「・・・だから寿美代だろう？」

（私の父親は馬鹿だった！）

そんな風にごちゃごちゃいつている中である同級生が当たり前だが、私達の関係に不信感を覚えだしたみたいだ

「・・・ねえ、実加」

「なに？舞南？どうしたの？」

「なんだか、寿美代と赤坂先生って特別な関係っぽくない？」

「うーん・・・いわれてみればそうかも？確かにねえ・・・寿美代なんて呼ばないよね普通」

「俺達もそう思うんだが」

マイマイと寺屋が話してるところに、先日紹介した。桂と大町がやってきた

「俺達もなんかおかしいと思うんだ、赤坂と赤坂先生の関係」

「だよな」

「赤坂っていう名前がおんなじだけでもけっこうすごいけど、なんだかねえ・・・」

「あれみたいじゃない？」

「うん」

さっそく、私達は疑問を抱かれてしまった

先輩方登場！（後書き）

すみません・・・今回長くなってしまいまして・・・読むのに疲れてしまった場合は申し訳ありません。読みやすくするように努力します・・・

疑惑浮上中・・・（前書き）

今回は部活以外の話です。疑惑浮上中の話なので、少しだけ短めです。

疑惑浮上中・・・

昨日の部活では、先輩方の自己紹介があった。色々な先輩方がいて余計緊張とワクワクが襲ってくる感じだった・・・だが、今日から約1週間・・・部活がない。そんな中一番気を抜いてはいけない1週間だというのに私の父親ときたら・・・

1日目

今日は1時間目から数学。その数学の授業のときだった

「・・・なので、プラス4は・・・」

父親先生（赤坂先生）は生徒に意外と人気であった。誰にでも優しく、相談事でもよく聞いてくれる、たとえるならみんなの父親だと思う

そんなことを思いながら、私は苦手な数学の授業で眠りにつこうとしていた

（眠すぎる・・・やっぱり、7時なんてきつすぎる・・・それが普通なんだろうけど）

それに気づいた父親先生は、いつものくたくたなジャージ姿で近寄ってきて

「なに寝てるんだい？数学の授業中だよ！寿美代ー！」

（その呼び方はやめろたほうがいいいつて言った気がしたんだけども・・・）

「ふあ・・・すみません！」

「苦手なのはわかるが、苦手だからこそ、やらないといけないんじゃないか？どうだい？」

「はい・・・」

「数学が苦手な人はたくさんいるぞ・・・なあ？拓也君！」

寝ていた、拓也はあわてておきて

「はい！そうだと思います！」

つと眠気眼でいった
クラス中が笑った

「な？がんばろう？」

「はい・・・すみません」

「あ、授業に戻るぞ！」

ツトいうことがあった

2日目

掃除の時間、父親先生は

「寿美代！話がなあ！」

「赤坂先生。名前なんですけど・・・」

「だから、寿美代だろ」

「はあ・・・」

一方、別のクラスの演劇部の4人（マイマイ・寺屋・大町・桂）
はこちらを見ていた

3日目

放課後

「気をつけ、礼！」

「ありがとうございますー」

「さ、帰ろうつと」

通学バックに手をかけたときだった

「寿美代、今日もう帰るのか？アイスを買ってくれるんじゃない
かったのか？」

「あの・・・赤坂先生。そんな約束してませんけど？」

「ばれたか！だが、かってくれないか？私はなあ・・・」

「絶対、スーパーカップミントはかわないですからね」

「な！・・・じゃあ、チョコ！」

「帰りますよ？」

また、一方演劇部の4人が見ていた

4日目

体育の授業

「あ！赤坂先生だ！」

「いや、授業がないんで見学に来たよ」

「先生、先生、見てよ！これ！」

「なんだこれ？すごいな！」

「でしょ！」

あいかわらず、人気な父親先生。体育の先生がにらんでるのは気づかないんだろうか？

「・・・お！寿美代！8段も飛べるのか！すごいな・・・先生なんか6段がやっとだったよ・・・いや？7段か」

「そうですか・・・」

「コツはナンなんだ？」

「赤坂先生は足が悪いでしょ、静かにしといてください」

「そうかあ？」

合同でやっていた2組のなかで演劇部の寺屋が見ていた

5日目・・・6日目・・・7日目・・・と過ぎていった

今日は久し振りの演劇部！・・・のはずが、風邪で休んでしまった

（38・4か・・・行かないほうがいいなあ・・・残念だな、
こういう時って一津も休んじゃうんだよな）

こうして私が休んでいる中、演劇部にあの4人が集まって何かを話していた・・・

疑惑浮上中・・・（後書き）

次の話はこの話などが必要になります。次回も見ただけであれば嬉しいですよ

完全なる疑惑浮上・・・（前書き）

今回は、私は風邪なので引っ込んでいます。なので、全体的にはほかの人が主役でいかせてもらいます♪

完全なる疑惑浮上・・・

・ 1週間ぶりの演劇部のはずが、私は風邪で休んでしまった。そんななか、私と父親先生（赤坂先生）の關係に疑惑が浮上していた・

部室前

部室前には、疑惑を持つてゐるあの、4人（マイマイ・寺屋・桂・大町・）がそろつていた

「なんだか」

「やっぱり」

「おかしい」

（よね）（よな）（な）（ね）

4人は声をそろえていった

「完璧におかしい！」

「本当だな！」

「コレまで見てきて驚いたけどね」

「ひとまず問題を挙げて整理してみよう」

みんな無言でうなずいた

「まず、寿美代のことを、 寿美代 って呼び捨てで言つてること」

「ほかの人は、男子なら君付け、女子ならさん付けなのに。」

「たまに呼び捨てもあるけど、それは男子しかなくて・・・」

「女子なんてありえなかった！」

確かにっといわんばかりにみんなうなずいた

「次に！赤坂も、赤坂先生のことをよく知つてゐることだ！」

「アイスの好きな種類」

「足が悪いこと」

「そんなこと、いつてなかったし知らなかったよね」

「1 - 3の人に聞いてみたけど、そんなこと言ってなかったって、自己紹介とかでも」

「こりゃーますます怪しいね」

寺屋は楽しそうにいった

「とにかく、この謎は突き止めようよ！気になるし！」

「確かに気になるしな・・・だれか赤坂のこと知ってる奴いないのか？」

みんな静まり返った

「・・・いないな・・・」

「俺と桂は別の小学校で中学に入って初めて赤坂のこと知ったから知らないな」

「原林たちはどうなんだ？仲いいんだろ？おんなじ小学校だし」

「・・・私は寿美代とは6年生になってから仲がよくなっただから・・・あんまり知らないな」

「私も！サカスとは6年の帰り道とかによくしゃべってたから、小学校のときは名前も知らなかったんだけどしゃべってるって感じだったし」

「誰も知らないな・・・これじゃ、手のうちようがないな・・・」

みんなお手上げ状態だったそのとき

向こう側から、全速力で渡邊が走ってきて、部室の隣にある第2音楽準備室のドアに激突した

その跡になぜか忍者みたいに甲賀も続いた

「あ！そうだ！おまえらは、赤坂のことなんか知ってるか？」

甲賀と渡邊は顔を見合わせると

「しらね」

「っていうかしつてなになる？」

けっこつな、ことを言った

「あのな、このことなんだが」

4人は疑惑のことを話した

すると、二人は今度はまじめに答えてくれた

「俺はおんなじ小学校だったが、知らないな、ここに入ってはじめて知った」

「俺もおんなじだよ、渡邊！」

「甲賀は？」

「俺は・・・あいつのことは少し知ってるかな」

「マジで?!」

控えめにうなずいた

「甲賀！教えてよ！やっとこれで関係がわかる！」

「俺は、3、4年のころ、一緒だったんだ・・・確かだけど。」

「ふーん。1、2年は一緒じゃないんだ」

「ああ、だってあいつ引っ越してきたから」

「引越し?!」

「ああ、東京から」

「そつか・・・それで？」

「・・・あとはしらね」

「ええー？」

「そんなにしらねえよ。興味もないものを知ろうとするか？」

「たしかになあ」

「結局わかんなかったじゃん」

「最終的には本人確認だね」

「うん・・・」

そして部活が始まったようだった

疑惑がさらに深まっただけのようだった。そして、約3日後、ついに・・・

完全なる疑惑浮上・・・（後書き）

♪
今回は1年生の会話だけでしたが、見ていただけたなら嬉しいです

不信感（前書き）

今回は私が復活します。部活では、また1年生の会話ばかりですが、ご了承ください。

不信任

1週間以上たって、風邪もすっかり治ったので部活にいったあの日のこと・・・

いつもどおり、部室に向かっていた私だったが、しばらくしてマイマイが寺屋と一緒に走ってきて、無言で部室に引っぱり出した
「ええ？！ど、どうしたの？あれ？なんか悪いことした？・・・すみません」

あわてて色々といってみたが、まったく効き目がなかったみたいだった。

「どうしたのって・・・ん？」

1年生が勢ぞろいとまではいかないが、一応部室にいた

「み、みなさんお早い集まりで・・・」

完璧に、やばいことがおきているのがわかった

（どうしよう・・・なんか相当やばいことをしちゃったかも・・・）

すると、マイマイは真正面を向いていった

「寿美代・・・なんか私達に隠してることない？」

「ないよ、まったくくない！ツト言い切れる！・・・うん」

（うわ・・・相当やばいことを・・・隠し事なんて・・・父親

先生のこと、くらいか」

私は隠し事が苦手みたいで、あせってしまった

「サカス〜」隠し事下手ー！汗かいてる」

「え？！嘘！」

汗を拭こうとしたが

「うつそ〜」だまされた！」

「な！」

余計わかんなくなってしまった

「サカス、お前なんか隠してるだろ。」

内心はパニックになってしまった

「な、何言ってるのさ、隠し事なんかしてないって、きのせい、きのせい」

みんなの視線がさらに強くなった

「絶対何か隠してる」

「なにをさ？はは・・・」

「おまえさ、ばかじゃねえの？そんなあせってさ、わかるに決まってるじゃん」

「そうだぞ」

（ごもつともです）

「赤坂、はなせよ」

「・・・話すことなんか何も無いって！な、」

「そんなわけ・・・」

「みんなー集まって！円になって！」

部長さんがみんなに声をかけている

（チャンス！）

「ほら！部長さんがよんでるから！早く！」

私は早足で部長さんの近くに行った

「ほら、みんなはやく！並ばないと」

みんな不満そうにだが、部長さんがもう一回言ったことで並んでくれた

何度もマイマイたちに　なんかあるだろ　っといわれたが、私は隠し通した

みんなには絶対知らしてはいけないと思ったからだ
絶対にしつてはいけない。秘密。絶対に・・・

不信感（後書き）

なんだかあやふやに終わってしまいました。が、ご了承ください

嫌な日々（前書き）

今回は暗い感じですが、読んでみてください。感想もお待ちします。改善点などためだしてもOKです！

嫌な日々

昨日みんなに疑われてしまったこと、それが原因なのかわからないけど、人がいるところにいづらくなってしまうた。どこへいっても秘密が後を突いて回っている。どうやっても頭から離れない。

それに、部活はどちらかといえば、嫌い になつてしまった

私が隠し事をしているのは明らかみたいで、みんなは私のことを信じてくれない、そして私を見る目がほかの人と明らかに違った。とてもいづらかった、空気が重苦しいというか、酸素が薄いところにいるみたいなの。そんな嫌な感じだった

(・・・部活の人達、みんな信じてくれてないな・・・当然か、・・・そっか)

部活はいつもと変わらない、気の抜けた部活。・・・客観的にはそうだとおもう、でも私にとっては毎日が嫌な日々だった

秘密を話してしまえばいい、そしたら楽になれるといくら考えたことか、でもやっぱりできなかった

部活では目線が痛くて、いづらい

普通に授業をしていても、父親先生(赤坂先生)がいて笑顔でいる、いづらい

家でも、母親がいて隠し事をしている自分がいて、いづらい

どこにいてもいづらくなつた。

苦しい気持ちのまま、しばらく時が過ぎていった

1ヶ月

入学当時より明らかに私は変わったようで、から変われることも

話しかけられることも激変した

そんなある日の部活のこと

いつもどおり、大人しく、部活をすごしていった
部活も終わったところ

「きおつけー礼！」

「ありがとうございますあー」

みんな帰っていった、今は夏が近く最終下校が6時になっている。
でもまだ夏真っ只中ではなく、5月の中間だった、だが、今日は大雨が降っていて外は暗かった

（帰ろうと）

バックに手にかけて帰ろうとした瞬間だった

「寿美代」

父親先生だった

「・・・なんですか？」

明るい笑顔で声をかけてきた

「そのだな・・・話しが・・・」

「だめですよ、最終下校時間は守らないと」

そういつて、帰ろうとしたときだった

「・・・寿美代」

「はい？」

少しいらつきながら、振り返ると、父親先生は真剣に私の目を見て

「話がある」

そして、みんなを帰らせたあとに二人きりで残った

「家には連絡しといたから大丈夫だ・・・さてと」

私のほうにしっかりと向き直ってはつきりいった

「寿美代、お前楽しいか？」

「・・・え・・・あ、うん！もちろん！毎日楽しいよ！」

声が裏返ってしまった

「そうか・・・」

父親先生は窓の雨を見つめて静かに言った

「そうか、ならなぜ、お前の目はそんななんだ？」

「え・・・」

目の色なんて思っても見なかった

「・・・お前の目の色見てみなさい」

「・・・」

しばらく無言が続いた、雨の音が聞こえた

「・・・何色かわかるか？」

「・・・ア、青？・・・なんて・・・はい。」

「・・・灰色だよ」

はっとした

「灰色・・・」

「お前の目から楽しさが消えていつているよ。暗いことしか見ないで」

うつむいた

「どうした？なにがあった？」

「なんでもないさ」

「そうか、じゃ、そのままでもいいんだな」

「・・・」

「いつてごらん」

「・・・秘密が、苦しくなってきたんだよ」

「秘密？」

「うん、みんなに隠し事してるのがなんだかきつくなってきた、ま、私がいけないんだけど」

「そうか、秘密って・・・えーと・・・」

「まさかとは思うけど忘れた？」

「・・・どれだったっけ？」

「・・・赤坂先生が私の父親だってこと！忘れたの？」

嫌な日々（後書き）

長くなったのですが、まあ読んでいただけると、嬉しいです。これからよろしくお願いします！

そういえば・・・（涙）（前書き）

しばらく空けてしまいまして・・・いまだに、6月ですが温かい目
でお願いいたします！ではどうぞ！

そういえば・・・（涙）

先日の事件、疑惑が生まれて、盗み聞きされて、ばれちゃったけど、楽しかった。つという感じの事件でした。

そんなこんなで今は（毎日が楽しくてしょうがないっ！）・・・
っと思えていたところが懐かしく思います

6月・・・この東高間中学校では6月に中間テストがあるのです・・・
それも合唱コンクールというものと重なったって
っということで、私はテスト勉強に追われていました・・・

中間テストまで約3週間

（やばい！やばい！苦手な教科がこんなにもできないとは・・・
はあ・・・）

窓の外は雨。今日はじめじめの雨の中、苦手な教科の授業を受けた後の休憩時間。最悪な時間である

（英語ってナンなんだよ・・・私日本人だって、使つかもしれないけどさ）

あいかわらずはれない私の気持ちと天気・・・それに比べて

「おっはようっ！忘れ物してないか？！もう授業だぞっ！教室に入れよ」

くたくたのジャージを着て廊下を歩いている父親先生（赤坂先生）

・・・（どこからあんな元気が沸いてくるのだろうか？）

「はあ・・・だめだ、疲れた」

「どうした？そんな疲れた目をして！次は・・・おお！数学じゃないか！しっかり教えてやるからな！」

（そうだった！父親先生の担当教科は数学だ・・・）

「あ、ありがとうございます・・・」

するとチャイムが鳴った

「席に着けー」

ガタガタ・・・チャイムが鳴り終わる前にみんな席に着いた

「はい、じゃ、号令！」

「きをつけ！・・・れい！」

「おねがいしまーす」

数人は、まだ机の中をあさっている

「はい、じゃ教科書８９ページ！」

みんないつせいに教科書を開いた

「それじゃあ・・・式の利用・・・」

みんなテストも近いことがあって少し真剣にとりくんでいる

（みんなすごいなあ・・・やらなければ、わからないが」

つというところで、高校にも響くということもあり真剣にやっていた私だった

テスト本番

ついにきてしまったテスト本番の日・・・恐怖の日だった

そういえば・・・（涙）（後書き）

あんまり面白い話ではなかったのですが・・・（汗）まあ流してくれと嬉しいです

・・・転校生？（前書き）

やっところさ、部活の話です。今回は転校生がキーポイントです、
温かい目をお願いしますっ！多少長いかもしれませんがご了承ください
さい

・・・転校生？

前回にお話した、中間テストの結果は・・・まあまあよかったという、微妙な結果だった・・・ま、そんなことはおいといて、今日は、夏休みの少し前の演劇部での出来事です。

今回もまた演劇部に行くために、長つたらしい階段を上り、長い長い、廊下を進んでいったことであつた

「演劇部ー集合っ！あつまつて！」

「はい」

まばらにあつまつてきて、みんな自然と円になつていた

「それじゃあ、座つて」

みんな仲がいいこと隣で少し崩れた円になりながら座つた

「今回は、話し合いをします・・・なんの、話し合いかというと・・・」

部長が切り出した瞬間だつた

「部長！発声と柔軟はやらないんですか？」

手をまつすぐに上げて桂が部長に聞いた

「桂、落ち着けつて」

大町は言つたが、桂は不思議そうに

「落ち着いてるけど？」

「そうだね、桂君。今日は時間もないことだし、話し合いで終わりそうだから今日は発声と柔軟は省くよ、いいかな？」

「あ、はい」

桂は納得したように手を下ろした

「それじゃあ・・・」

「はいはいーい！何を話し合つんですか？！」

山上先輩はにこやかな笑顔で質問した

「それを今言おうとしたんだよ？山上」

「そ、そうなんですか」

「そうだぞ、山上。永遠に黙るか、永遠に眠るか、どっちがいい？」

これまた香川先輩もにこやかな笑顔で毒を吐いていた

「すいませんしたっ！」

（こういう風景が一番平和で好きだな）

私はほんのりと思っってしまった

「どうしたの？寿美代？顔がにやけてるよ？」

「え？！嘘マジで！」

「それでは、改めて、今日は老人ホームの劇決めをしたいと思っています」

わーわー 先輩方は知ってる、やるんだー！ ツ人いうかたがたが多いのも関わらず、1年生は全員ハテナマークの顔をあいていた

「1年生はわからないと思うので簡単に説明を・・・演劇部は夏休みごろに老人ホームを訪問して老人の方と、触れ合う機会があるのですが、そのときに1年生の劇のなれも含めて毎年『おとぎ話』をやっています・・・それでなんのおとぎ話をやるかを今日決めたいと思います」

「おお・・・」

みんなから納得の声が漏れた

「では、案を出して・・・」

そのときだった

ガラッ！

「また、さえぎられたな、沼南」

「今度は誰なんだ？・・・高橋先生ナンのようですか？」

「いや、俺からは特に用はないんだけどね、紹介したい子がいるんだよ」

「紹介したい子？ですか？」

「そうだよ」

「それって、『転校生』とかなんかっていうことですか？高橋先生」

「そつだよ、よくわかつたな」

ざわざわし始めた中に一つの人影が出てきた

「あつ！俺知つてるかも、こいつ」

「本当か？誰だ？甲賀？」

「私も知つてる！」

「え、誰？実加！教えてよ！」

「こいつは確か・・・1-2に転校してきた・・・」

『菊間 勇』つといます。富山から転校してきました、演劇部には興味があつたので、高橋先生にお願いしてみると、案外軽く返事をもらえたので入部させていただきました！これからよろしく願ひします！」

転校生の菊間と名乗る男子は軽くお辞儀をした

「菊間・・・菊間先輩の兄弟？！」

「違つよ！兄弟いるけど、違つよ！い、勇君？とは！」

「名前あやふやなら無理して言わなくて言いですよ」

高橋先生は時計を見ると

「ま、盛り上がっているところ悪いんだけどね、もう最終下校時刻になるよ？」

「え！」

みんなが一斉に時計を見た

「で、では！話し合ひは、また次回にやります！・・・きょうつけ礼！」

「お願いしまーす！」

反省会が始まつた

反省会が終わつた

「寿美代ー！先いつてるよー」

「うん！正門で！」

私は準備が遅く大体最後らへんに出てしまう・・・っといつても

電気を消したいがためというのもあるのだが

「うわ！紐が絡まった！」

バックにかかった紐と格闘していると転校してきた菊間が来て耳元でこういった。

『マフィアは情報をつかむのが早いんだぜ？お前の父親のこと、親子のこと・・・そして秘密を数人にばらしたこと・・・どういうことかわかってるよな？』

「え・・・」

それだけ言い残すと転校してきた菊間は

「すいません！部長さん！やっぱり、ペンバックの中にありました！」

「そうか！じゃ、閉めるぞー赤坂も早くでろー」

あまりのことに一瞬頭がフリーズしてしまった

「・・・は、はい！」

その帰り道、もう一度考え直してみた

（秘密を知ってる・・・私達のこと、マフィアも、しかもばらしたみんなまで・・・）

ふいにみんなをみた、楽しそうにしゃべっている

（みんなを巻き込むわけにはいかない・・・やっぱり覚悟が中途半端だったんだ・・・秘密を知っているっていうことは、マフィア関係のもの・・・それかスパイ。やばいな、これは父親先生に・・・）

頭の中に楽しそうに生徒と授業をしている父親先生が浮かんだ

（・・・だめだ、いっちゃいけない・・・だったら、私が直接確かめるか）

私は決心した

学校の窓から誰かが見ていることも知らずに・・・

・・・転校生？（後書き）

長ったらしくてすみません・・・新キャラでましたので、今後の活躍にご期待&ご注目ください！急激に話は進んでいきますっ！これから改めてお願いします！！

だめな奴（前書き）

今回は、新キャラ菊間と主人公との話しが主要です。ぜひとも温かい目で見守ってください、ではどうぞ！長いですが・・・（汗）

だめな奴

新しく富山県から転校してきたという 菊間 勇・・・見た目はきのよさそうな、元気いっぱい男子だが、昨日のあの言葉・・・『マフィアは情報をつかむのが早いんだぜ？・・・どうなるかわかってるよな？』・・・マフィアって、怖いものだったんだ。

演劇部放課後、屋上にて

屋上にはけして心地よいとはいえないけど、涼しい風が吹き付けていた

私は、誤解も覚悟で、菊間を呼び出した
菊間は全てをまるでわかってるかのように

演劇部休憩時間

「菊間さ、あの・・・そのだな・・・えっと！」
勇気がない私はうじうじしていると

「・・・放課後に屋上な、誰にも見つからないようにな。んじや！」

簡単に場所と時間を指定して菊間は言ってしまった・・・まるでこのことを予定していたかのように

今

あいかわらず、風が吹き付けていた・・・
先に切り出したのは、菊間だった

「何聞くんだよ？ま、昨日のことだろ」
天気は晴れから雨に変わりそうだった

「うん」

「俺は、マフィアだよ。お前の父親が裏切った『黒瀬組』のな、若頭さ」

菊間は空を仰ぎながらいった

「やつぱりか・・・若頭ね・・・なんだか、やくざみたいじゃないか？そこはボスとかじゃなく？」

「そんじよそこらの、マフィアじゃないんだぞ。お前の父親はな、組を捨てて。ボスを捨てて。部下を仲間を捨てて。こんなぼろ中学校にきたんだ！」

（ぼろつて・・・）

「お前の父親はマフィアの世界にとって一番だめな罪を犯した・・・『取引先と取引し、死人を出すこと』だ」

風はとまった

「お前の父親はな、人殺しなんだぞ？」

「え・・・」

私の父親が人殺し？え・・・まって、えっと・・・ええ・・・

「なんて、いうと思ったか？」

菊間は混乱している私を尻目に、笑っていた

「菊間」

「ごめん」

「でも、大罪を犯したのは確かだ。マフィアは裏切り者は許さない、だって秘密がばれるかもしれないんだから・・・秘密をばらさないようにするのは・・・わかるよな？」

背筋がぞつとした

「ばらしたとかいうのは？」

菊間はこちらを見て、当然のような顔をした

「秘密は絶対守るのが主義なんでね、マフィアは」

屋上のドアに手をかけていった

「お前、そんな生半端な覚悟ではしゃいでたんだろ？甘いんだよ。マフィアにもうお前は片足突っ込んでるんだよ・・・」

お前の友達もな」

階段を下りながらも鋭く暗くしつかりとした声でその言葉は聞こえた

『だめな奴』

カンッ！カンッ！・・・階段を下りていく音が聞こえて屋上は私独りになった

無性に自分が無力に思えて、空を見上げると、雨が降ってきた
サアアアッ・・・

雨が、乾いた屋上のコンクリートをぬらし、私の顔も体もぬらした

（だめな奴か・・・そっか）

雨は無性にも地面に振りそそいだ
心の奥底には言葉が響いていた

（だめな奴）

わたしはしばらく、そこに座りつくしてしまった・・・

マフィアって怖いものだった。

だめな奴（後書き）

なんだか、くらい話で、混乱してしまうような感じてしたが理解で
きたでしょうか？できたら嬉しいです。まだまだ続いていきますの
でお願いします！！

だめな奴・・・でも！（前書き）

久しぶりに続きを書きます。まあ、今回は刺激が強いかも知れませんが・・・すみません←

だめな奴・・・でも！

昨日はショックを受けたものだった・・・菊間・・・いつたいあいつは・・・敵なんだろうが、何をしにきたんだろうか・・・そんなことがあれば、授業なんて耳に入るわけがない、ノートは白紙・・・とはいわずに、黒板のものを写すだけだった。

昨日の屋上の日から、大雨が続いている、まるで、何かを悟っているように

「寿美代ー！ー！」

向こうのほうから、マイマイはかけてきた、いつものような明るい笑顔で

「寿美代！聞いて！今日ね、変な夢見たんだ！・・・」

「サカスう！・・・あっち向いてほい！」

「急だな！」

寺屋も廊下を取り掛かったので一緒にしゃべることにした

「今日ね、お弁当のりんご落としちゃったんだあ・・・はあ・・・」

「」

「ドンマイ、マイマイ」

「私も！お弁当全部落とした！」

「え！ド、ドンマイ？」

「同情するなら、金をくれ」

「やだよ！」

そんなくだらないけど楽しい、幸せな会話が続いていた・・・いや、続いてほしかったかな

「・・・そっいえば、寿美代」

「何？」

楽しい会話の最中にマイマイは少しくらい顔して切り出した

（どうしたのかな？悲しいことだろうな？でも、なんだろう？）

マイマイは私の目をまっすぐ見て

「・・・あのね、私の家の前に・・・その・・・あn・・・」
キンコンカーンコン！！

チャイムが鳴り出して、生徒達が雲の子を散らすように自分の教室に帰っていった

「あ！やっぱ、部活でね！じゃ！」

「え、ちよっ！」

マイマイはそういつて、走っていつてしまった

（マイマ・・・イ？・・・胸騒ぎしかない、何でだろ？）

そう思つて、立ち尽くしていると、くたくたのジャージを着ている赤坂先生（父親）が頭を教科書でたたいた

「なーにやってるんだい？早く席に着きなさい！数学始めるよ！」

いつものように明るい赤坂先生はみんなに笑顔で言つた

（・・・悩んでいてもしょうがないか、普通に、『卵焼きがうまくできちゃった！』と火かもしれないし！うん、気にしない！！）
何とか気持ちを切り替えてみた・・・なんとか

放課後、部室にて

もやもやしている気持ちを無理やり切り替えたまま、演劇部の休憩時間になつた

マイマイは、私を第二音楽室の隣にある、第二音楽準備室にいつつといつた

（・・・いつてみよう）

私は準備室に行つた・・・寺屋も、桂も大町もいた
準備室は露であるからかもしれないが、とても息苦しかった

「ど、どうしたの？みんな？急にさ？」

マイマイはいつた

「寿美代、あのねきつと寿美代には関係ないとおもつけど・・・
私達5人の部屋にこういうものがあつたんだ」

（きつと・・・疑ってるんだね、つということは・・・）

マイマイたちはある、砂時計を差し出した

「ス、砂時計??」

「それはいいんだけどね、この砂時計にも字が書いてあるの・・・ほら」

よく見ると、そこにはある文字が5つ書かれていた・・・

「どうしたの?これが?」

私は本当に動揺してしまった・・・だってその5文字が『えんげきぶ』だったからだ

「どうしたの?それが?」

大町は言った

「演劇部はいいさ、それよりもコレをおいた奴がわかってるんだ」

「え!」

桂は重い口を開いた

「そいつは俺達がよく知っている人だった」

寺屋はいった低い声で

「犯人は・・・サカス、あんただよ?」

一瞬どころではなかった、何を言ってるのかわからなかった

「そいつは赤坂に間違いはないんだ、それになんで俺達がそれを見ただけでこんな風になっているのかというと、」

「そいつがマフィアだったからだ」

「は?」

心臓が波を打っているのがわかった

「なんでわかるの?ま、マフィアだってことが?」

（なんとなくっ!・・・なんとなくっって!!）

その願いは崩れた

「そいつが、言ったからだよ。『私はマフィアのボスなの。コレからよろしくね』って」

頭がフリーズしてしまった

だめな奴・・・でも！（後書き）

ながーくなっけしませんでした、それに若干・・・っというか全然内容が理解できないかもしれませんが、そこはご勘弁ください！

二人の自分?! (前書き)

今回は、話しがまじめにおかしくなります。
ですが、温かい目で見ただけだと、嬉しいです・・・

二人の自分？！

第2音楽準備室の窓は露のせいでもあり、私の頭の中と同じように曇っていた

「な、な、なにいいだすのさ？！突然！？」

私は何とかフリーズした頭を元に戻していった
マイマイは悲しい目をしていった

「寿美代・・・寿美代のお父さんのことは知ってるし、私達是谁にも言っていないよ？」

みんなうなずいてくれた

「そうだよっ！本当は言いたいことを我慢する苦しみがわかるか！サカス！」

寺屋はうずうずしていた

マイマイは寺屋をなだめると

「・・・寿美代、私達はできるだけだけど、隠し事はしないようにしている。だから、あなただって隠し事しないでよ？ね？」

「そうだぞ、赤坂」

みんな私を食い入るように見た・・・でも

「私は何も・・・な、なにも隠してないよ！・・・うん」

（隠し事はある・・・だけど、この件の隠し事はしてない！」

「寿美代！」

「だいたい！！本当に私だった？！違うかもしれないよ？」

大町は壁に寄りかかっていたのを起こしていい始めた

「あの日は、俺が部活から帰った後のことだった・・・」

大町はポツリポツリと語り始めた

大町の帰り道にて

「雨降ってるなあ・・・はあ・・・」

雨はずっと降りきっていて、かさにけたたましく打ちつけていた
「・・・早く帰ろうと・・・ん？」

大町の家の前に、ある一人の人影がたたずんでいた

（誰だろう？・・・ま、いいや）

大町は家に入ろうとした・・・すると

『君、東高間中学校演劇部の、大町栄太君よね？』

（え・・・）

それは脳に直接届くような、鋭く、冷たい女性の声だった

「・・・な、なんですか？」

（何で俺の名前を知っているんだろう？）

女性は、雨にぬれている肩の少ししたまで下がった髪を揺らしながら微笑んでいた

『私のこと知らない？・・・残念だわ』

（こういう場合は警察か・・・）

大町は家の玄関のほうに回りながらいった

「俺・・・急いでるんで・・・では」

走り去ろうとしたすると

ガタ

「な・・・」

大町の前に黒いかさが落ちてきた

驚いて後ろを振り返ると

『逃げないでよ？ただ話を聞いてくれるだけでいいのよ』

笑っていった・・・その顔は

「赤・・・坂？」

赤坂そっくりだった

『よくわかったわね！嬉しいわ、それじゃあもう一つ』

女性は、信じられないほど早く、いや俺が遅いのかもしれないが、とにかく早く俺のそばに来て耳元でささやいた

『私は赤坂寿美代・・・で、・・・マフィアのボスなの。コレ

からよろしくね♪』

ところどころだが、雨の音で聞こえなかったが、重要な部分は聞き取れた

「なにいつて・・・」

『大町君の部屋に砂時計置いといたから・・・友達にも会ってくるから、情報交換と架してみてね♪』

女性はそういつと、かさも刺さずに雨の中に消えていった・・・

今

（信じられない・・・何が起きているんだろう？）

するとマイマイが

「私達全員おんなじ様なことがあったの・・・わかるわよね？」

（だから、真実を話してつてことか・・・いや、だから！知らないって！）

「どういうことが説明するよな？」

「いや、でも、本当に・・・」

「ここまで証拠がそろってるのに白を切るつもり？サカスけじめつけないと！」

「いや、だから！」

「寿美代！」

思いつきり、の大声でいおうとした

「だから！・・・」

そのとき

ガラッ！！

準備室のドアが勢いよくあいて、そこから・・・菊間が現れた

「みんなあー！もう発声始めるって部長があ・・・ん？」

みんなが空気を読めよ・・・ッ人言う顔で菊間を見つめていた

「・・・え、なんかごめんっ！お取り込み中でした？すいませんっ！」

菊間はすまないといって手を合わせて帰り際でいった

『・・・そういえば、赤坂って、マフィアに似てるよな！（笑）

・・・なあ？』

最後の一言は、みんなの心をつかんでしまったらしい
みんなは無言で準備室を出て行った

（私の人生は波乱しかないのかぁー！）

またもや、波乱が出てしまった・・・

部室が見える電信柱の近く

電信柱の近くにあの女性が立っていた

『あらら・・・ずいぶん攻められちゃったのねえ・・・しよ

うがないわね、私がじきじきあつてあげようかしら？』

クスリ・・・と女性は笑った。

二人の自分?! (後書き)

なんだか、難しい感じになってしまいましたが、次回は寿美代と謎の女性との一騎打ちです♪お楽しみに・・・してくれたら嬉しいです。

お客様（前書き）

しばらくできなかったのですが、話が微妙かもしれません。お願いします！

お客様

雨は窓にたたきつけるように降りしきっていた

「はぁ・・・」

私は雨が降っている空を見ながら、窓に白い息を吹きかけていた

「あんだかなぁ・・・」

最近はその事件があつてから、みんなが疑いの目で見てくるようになって・・・はぁ・・・

「本当のこといつてるんだけど・・・」

しばらく窓を眺めていたときだった

ピンポンパーンポーン

「ん？」

校内放送がきた

『1年生の赤坂さん。1年生の赤坂さん。玄関にお客様が来ています。至急玄関に向かってください。くりかえします・・・』

「お客さん？」

校内放送は終わってしまった

「誰だろ？ま、いつてみよう」

窓のそばに座っていた私だったが、校内放送が終わってからすぐ駆けつけると

そこには、父親先生（赤坂先生）がいた

「あ、赤坂先生?!」

父親先生はいつものくたくたなジャージではなく、正装をして襟を治していた

「・・・おお！寿美代か・・・」

父親先生はいつになく緊張しているようだった

「・・・ん？その人」

「ああ・・・お客さんだよ」

父親先生のすぐ後ろにいた女性は、雨だが、もう夏というのに真

っ 黒な正装で深く帽子をかぶって黒髪をたらしていた

「ゴクン・・・」

おまわずつばを飲んでしまった

「じゃあ、客室に移動しようか？」

「う、うん」

私は言われるがままに客室に向かった、謎の女性も無言でついてきた

「・・・」

客室に向かうまでの廊下はこれまで感じたことがないほど長く、新しいものだった

「・・・ついた、さあはいって」

父親先生は、客室のドアを開けてくれた

私と謎の女性は無言でドアに入った

「さてとつ。」

父親先生は、お茶類を出して、机に置きソファーにどっしりと座った

「飲んでいいよ」

そういつている父親先生はせんべいを食べていた

「は、はい・・・」

すると今まで無言だった謎の女性は口を開いた

『改めて始めましてかしらね？赤坂寿美代ちゃん。』

その一言で、空気がしびれた

『あのね、私。演劇部つぶそうと思って交渉に来たのよ』

「は・・・」

頭がフリーズした

お客様（後書き）

なんだか、一騎打ちまでいけませんでした。
今後も読んでいただけると嬉しいです

交渉決裂！（前書き）

長らく空けてしまいました。今回も前回の話の続きです

交渉決裂！

頭がフリーズしてわけがわからなくなった

「え．．．演劇部をつ、つぶしに来た！？んですか」

敬語もままにならない

「ええ、まず交渉だけど」

出されたお茶を礼儀正しくのみなから答えた

（何いつてんの！？なにがどうなってるの．．．って言うかコノ人誰！）

涙が出てきそうなくらいわけがわからなかった

（どういことなんだよあ！そうだ！父親先生なら！）

私は希望のまなざしで父親先生を見上げた

「ん？」

父親先生はただたんにせんべいを食べていた

（だめだったあああ！）

頭を抱えてみたがわからなかった

（落ち着け、ひとまず質問で片付けていこう）

息を深く吸い込み、吐いた

「あ、あの．．．ひとまず質問を。」

謎の女性は顔を挙げた

「あなたは誰ですか」

にらみながら言ってしまった

「え？」

想像以上のびっくりした顔をして父親先生のことを見た

「私のこといってないの？．．．お父さん」

「！！！！！！！！」

またフリーズ

「お、おとう．．．父親先生！」

父親先生はテレながら

「いやあゝ忘れてたよ、紹介する！お前の双子の姉の 赤坂 千羽だ」

（きよ、兄弟がいたなんて・・・）

数分で頭が壊れかけている

「そ、そんな兄弟のことなんて聞いたことが」

「私は親戚の家に生まれてすぐいつてしまったから、あったことがなかったのよね」

「えええええ！？」

なんだか私だけがあわてて馬鹿みたいだ・・・でもそこは我慢して

「あの、それでなんで演劇部を？」

私の姉はゆつくりと立ち

「あなたを時期ボス候補にするためよ」

時が崩壊した

「まさか、俺がいないから俺の実子である寿美代を・・・」

「ええ、それで交渉で」

座った跡に紙を出し

「あなたがボスの候補になるか、演劇部をつぶすか」

「ええ！？」

にやりと笑い

「ちなみに、ボス候補になるならお父さんは・・・見つかるわ」

「え・・・そんなの、だったらどうすれば！」

父親先生は悲しい顔をした

「もうひとつ」

「まだあるの？」

「あなたのお仲間に渡した砂時計、あれは爆弾だから
部屋の空気が涼しくなった

「ば、ば、ば、ば、ば、爆弾！？」

部屋が震えた

「砂時計爆弾よ、ま、交渉も決裂しちゃったみたいだしかえるわ」
姉はたった

「まっ てみんなは！」

すぐる思いだった

「数日後から組から指示が来る、それに一度も失敗せずに最後までたどり着けば・・・」

「ありがと・・・」

姉はさっ ていった

砂時計爆弾解除作戦の始まりだ！

交渉決裂！（後書き）

少々長くなってしまいました。また温かい目で見ていただけると嬉しいです

邪魔者！（前書き）

さてさて、これからマフィアが深く絡んできます。わからなくなってしまうかもしれませんが・・・努力します！

邪魔者！

昨日の出来事を頭の中で簡単に再生した

「演劇部をつぶしにきたの。お前の双子の姉・・・千羽だ。砂時計は爆弾だから。あなたをボスにするため。ボスになればお父さんはみつかる。マフィアから出される問題を全て答えれば。」

フリーズしっぱなしだ。

まったく平和が恋しい

（ひとまずみんなから砂時計を回収できるかな？・・・とはい
うものの）

みんなはあまり私のことを信じていないようで、しゃべるがどこか警戒バリアみたいなのを感じる・・・元から信じてくれていたかは不明だが。

（信頼回復って言っても、このことをしゃべるのだけは口が裂けてもいえないな。）

マフィアの若頭という、転校生＆演劇部員の『菊間勇』なぞめいた言葉でみんなを誘惑してる奴。

（はああ・・・それに問題の父親先生も）

いまではすっかりこの人気者先生になっている。くたくたなジャージがトレードマークだ

（どうもこうもって、マフィアからの問題を待つか・・・うん）

私が浮かない顔をして台本を見ていると

「ばばあみつけ。」

「うるせっ！」

きづけば菊間がそばにきて笑っていた

（心配事の種みつけだよ。こっちは）

さらに浮かない顔をする

「おいおい、ふけ顔がさらにふけてるぜ。それとお前知りたい

ことがあるだろ」

「しりたいこと？ふけ顔は余計だ！」

「そうだよ、鈍感だな。（小声で）俺はマフィアの若頭だぞ？」

「それが」

いまさら言われたってどうでもいいことだった。それも一つの悩み事だが、それより今は爆弾・・・

「砂時計とか。」

そうそう、砂時計のばくだん・・・はい！？

「菊間！何で砂時計！」

「こういうときは、屋上へGO！」

そういつて走って男子の群れに言ってしまった

（やっぱり屋上。また雨が降んないかなーなんて」

「放課後は案の定あいてるし・・・いこうかな」

少しだけ荷が下りて、別のものが背中に乗った気分だった

放課後

本当に雨が降った

（ええー。傘差してはなすのか・・・ふう〜）

傘を差して、待っていた。かさにはじかれる雨の音がリズムをかなえているようだった

「遅かったな。」

「色々と心の準備があるんでね」

かさの中から顔をのぞかした

菊間はこういうときには性格が変わる気がする・・・二重人格ってか

「それじゃ、何から話そうか。まずは・・・」

菊間はどこから持ってきたのか封筒から手紙を出すと

「コレが最初の問題だ。失敗したら・・・ドカーン！だぞ？」

嵐が訪れた

邪魔者！（後書き）

こんな話です。次回は問題が出されます。しょーもないのからはあ？ておもつるまで皆さんも考えてみてください。

第一問！チャラン♪（前書き）

今回から問題を出していきます。一緒に考えてみてください！

第一問！チャラン♪

私の前に突き出された封筒からおぞましいほどのプレッシャーが感じられる

（あああ！なんか怖くなってきた・・・）

余裕ぶった表情をかましてみたが、菊間にはばれているらしくにやりと笑っていた

（うわあゝ悪魔だ）

恐る恐る封筒を受け取った

かさをい支えながら封筒を開けるのは至難の業だ、ごく丁寧にふちからふちまできれーいにのりが張ってある。

（几帳面すぎる・・・）

やつとのことであけたときには、傘をさしている意味がないほどぬれてしまった

（びっしょびしょだ）

必死に制服で封筒を拭いていると

「どんくさいな」

「ええ？」

かさを吹っ飛ばされてしまった

「なにすんのさ!？」

「いいだろ、ぬれてんだから」

「だけどさ」

結局ぐっちょりぬれて紙を呼んだ

『チャラン！はじめまして。現時点ボスのはてなっちです。名前寒かったかな？あははは・・・　ひとまず君に問題を出そう！間違えはなしだよゝドカン！！なんてね。んじゃいくよ

（1700頃できた車の原型といわれるものは次のうちどれ？　1

蒸気自動車　2　足こぎ式　3　ぜんまい式　4　スクーター式

）
次のうちどれ？

「はあ？」

間の抜けた声が出てしまった

こんなのただの雑学だし、調べれば出てくるだろ。

「本当にコレが問題？」

「ああ、はてなっちは様は冗談というかジョークが好きだからな。ちゃんと答えるよ、答えは明日の放課後まで。じゃ！」

「じゃ！って」

いつの間にか雨は上がっていた

「簡単すぎる。・・・ま、でもいつかかんたんのはさつさと片付けちゃおう！もしかしたらずっとこれかも！？よっしゃ！」

私はルンルンで走っていったがその後には帰ったはずの菊間と、千羽がいた

「大丈夫ですか？アンナ感じで」

千羽は雨の降った跡なのにアイスクリームを食べながら

「うーん・・・トリックに気づけばいいんだけどな？まずまずの3点！ってとこかな」

「せっかく俺がヒントでぬらしたのに」

はあーと二人はため息をついた

ルンルン気分の私の手紙は問題の雑学の下に重なった紙の一部が
敗れ落ちていた

第一問！チャラン♪（後書き）

簡単な雑学でした。でも本題はこれからです。温かい目で見てください

一味違う(前書き)

しばらくぶりの登校です。

一味違う

「さあーで、約束の明日までまだまだ時間がある。部活も終わった。答えもOK！どうするかなあ・・・うん。土手にでも行くか」
私は思いつき、家から15分ほどの川の土手に来た。

「風が気持ちいいな。」

暇なときや悩み事があるとき私は必ずここに来る。川が細く流れ、土手が私の知らない土地まで続いていて、桜の木が植えてある。桜もきれいだ私が好きなのは、風と一緒に木の葉が揺れて夕日に染まったオレンジの桜が大好きだった

「きれいだなあゝ色々あったな。コノ半年？かな。」

思えば、月日はたち、もう、前期が終わろうとしていた。早いものだ
「・・・」

今さっきのことを思い出し、紙をみた。雨はすっかり上がっているが、私の制服と紙は雨のあとを残して風に吹かれている

「・・・マフィアか。」

静かに目を閉じてみて、紙を両手でしっかり持ち、土手の青草のじゆうたんになつころがった

風に吹かれて紙がぺらぺらとめくれては戻り、めくれては、戻り、めくれては・・・え？

よくみると、風に吹かれながら、一番したのはじっこがはがれている。おかしいいな？

「・・・あ！」

気になったんで、手にとって見ると、やぶれてしまった。

「しまったな・・・雨でぬれてたからはがれて・・・あれ？菊間まさか！わざと雨にぬらして・・・んなわけないか。あいつがな？ひとまず水につけるか」

思い立ったのだが、なかなか体が動かない・・・っというか、明日だし。ツていうき持ちが強くて、のんびりしたいと体がいつている。

しょうがない

「モウしばらくのんびりするか」

ボーっとしていたのだが、しばらくすると、後ろに気配を感じたので振り向くと、そこにはハスキー犬を連れただおそらく30代後半・・
・くらいの男性が、あごひげをオレンジ色に染めながらたっていた。

「本当に、きれいな夕日だな。」

普通の台詞・・のはずだがどうやら私は神様に嫌われているらしい。しゃべっているのは、

リードにつながれたハードボイルドなハスキー犬だった。

一味違う(後書き)

なんだかすごい方向に行っています。がきにせず(汗)
またよんでくれるとうれしいです。

ハードボイルドの犬ってさ・・・（前書き）

今回は、犬と私のコントみたいな会話が続きます（汗）
大目に見てください・・・

ハードボイルドの犬ってさ・・・

オレンジ色の桜の花びらが私の頭の上を通過していると同じく、ハードボイルドな犬・・・のけも頭の上を通過していった

「あの・・・すいません。ちよつと・・・そのお」

犬？に失礼がないように、靴ヒモを直すフリをして、制服に口を当て、心の中で精一杯

『犬がしゃべるかあアアアアアアアアアア！』
と叫んだ。

（はあはあ・・・叫んだ・・・）

結構な消費量が心臓をめぐっている中、気配がまた横にしたので目だけを横にすると

「いい夕日だな。世界がまるでとまっているようだぜ。」

ハスキー犬が・・・足を土手に投げ出して、いつのまにかサングラスをかけて、遠い目で・・・夕日を眺めている

「うう・・・ゴホン！ごほ！すいません・・・」

鼻をかむフリをして心の中で

『だからなんで犬がしゃべってるんだよ！！しかも、何でサングラス！？なんで普通に座ってんの！？なに渋い言葉並べるの！？』

なんだかモウ、泣きそうだ

「おい、おい、夏風邪はやかいだからな。ごぼうを温めてスー
プにして飲むと、いいらしいぜ」

「ごほ！またすいません」

『豆知識ありがとうございます！！！！早速試します・・・つ
てなるかあ！！』

ある程度心で突っ込むと、落ち着きはしないが、呼吸ができるようになったので改めて異様な光景をみた

飼い主は何をしてるんだろう？銀のひげをオレンジに染めて細い目で夕日を見つめては、カメラで撮っている。レトロなカメラだ。

モウ売ってはいないんじゃないかっていうレトロなカメラだ。

「お嬢ちゃんがこんなところで何してるんだ。モウタ方だぜ？」

何より一番おかしいのは、あきらかにコノ犬だ。

何で人間っぽく座って、人間みたいにコレが普通です。見たいな感じでしゃべっているのだろうか？

「あ、あの」

声をかけてみる。まずコレが一番肝心だ

「なんだ？お嬢ちゃん？」

少し、お嬢ちゃんに困ったので

「お嬢ちゃんじゃなくて、あ・・・」

名前を言う前に

「しっ！お嬢ちゃんの名前は知っているぜ。だがあえていわないのさ。俺はこっちのほうのほうに気に入っているんでね」

ハードボイルドだあ・・・

「は、はい。それで、あなたのお名前は？」

なんだか犬に向かって「お名前は？」なんて・・・ばかげている気もする

「俺か？俺は、マフィア黒瀬組ボス。西郷だ」
なっ！！！！！

激震が走った。マフィアのボスが犬う！？しかも名前が西郷ってえ！？まてまて、おちつけ・・・うん、そうだ。マフィアは別世界だもの。そうだよ、コンなのはありえる世界なんだ

「ところでだが、お嬢ちゃん。俺はマフィアではちいと顔が知れた奴なんだ。」

そらな。認識されてるもん。いいんだよこれで

「おっと！間違えたぜ。認識されてんのは、主人のコックだ。カメラで夕日を撮っているやつだぜ。銀のひげがいかしてるだろ」

認識されてないの！？

「あの、西郷さん。何でしゃべったりしてるのにコックさんデ知られているんですか？」

「俺は犬だからな。犬がしゃべったらおかしいだろ」
自覚アリ!?

「俺がコツクの声をしてるんだ。腹話術みたいなかんじだな」
犬が人を!? 普通逆じゃない!?

「そういうわけさ。それで本題に入る」
本題か・・・

「俺をもらってくれねえか」

・・・

「は？」

泣いてもいいですか神様。と心でつぶやいた

ハードボイルドの犬ってさ・・・（後書き）

なんだか変な展開ですけど、読んでいってください。
お願いします！

もらいます・・・(前書き)

久しぶりの投稿です！

もらいます・・・

オレンジ色の桜の木下で私はハードボイルドな犬に出会った。

「俺をもらってくれねえか？」

そういつてきた犬。西郷。

マフィアの黒瀬組の現時点（代理）のボス。犬の西郷（飼い主のほうらしいが）

おかしいだろ。

「え・・・無理ですよ？」

当然こう答えた。

「俺をもらってくれねえか？」

いつてきた。

「無理です。」

答えた

「俺をもらってくれねえか？」

「無理・・・」

「俺をもらってくれねえか？」

・・・西郷っていう犬・・・想像以上に頑固だ

「お願いだぜ。お嬢ちゃん。もらってくれ」

「いやです」

これであきらめるだろ

「・・・しょうがねえ」

やっぱり！よかった・・・

「相棒。あれを」

そついうと、カメラを持っていた人がダンボールを運んできて

「フム」

何食わぬ顔で乗った西郷は顔を・・・というか鼻を私の顔に近づけて・・・。潤んだ瞳で訴えかけてきた。

「な！」

「キユウン・・・」

なんて可愛いんだ！そ、そんな目で、そんな風に泣かれたら・・・

「参りました。」

「ウム」

負けてしまった・・・潤んだ瞳目！

「では早速お邪魔するぞ」

「はい・・・」

土手を歩いていく影三つ

「お母さん・・・あの、犬拾ったんだけど駆つていい？」

「いいわよ。でも世話はちゃんと・・・あら？その人は？」

「・・・」

ああ、コノ人は犬の・・・つてえ？！

おじさんまでも隣にいる

「なああああ！」

家族が一匹と一人増えました

もらいます・・・（後書き）

ってな話でした

甘えてんじゃねえ！（前書き）

パソコンの調子がずっと悪く、長らく投稿ができずにすみませんで
した！やっと話しが動いていきます。
本当に申し訳ないです！

甘えてんじゃねえ！

私の家に家族が一匹と・・・一人増えました。

「あら？その人達は？」

「ああ・・・捨て犬を拾った・・・人達？・・・あ」

私の後ろにはカメラを持った白ひげのおじさんが一人・・・なんであなたまで

「・・・俺はこのお嬢ちゃんに助けてもらったものでございます。お母さん。申し訳ないが、ある事情で住む場所がないんです。どうか、家に上げてもらえないでしょうか？」

あのカメラを持ったおじさんがしゃべり始め丁寧にお辞儀をした
びつくりして目だけで後ろを見ると、ハードボイルドなあの犬西郷
が器用に腹話術をしている。普通は逆なんじゃないだろうか・・・

「・・・」

お母さんは驚いた顔をしてばちくりしている。当然だ、やつぱり無理だろう。この二人には帰ってもらおう。あ、でも頑固だしなあ。

でもさすがにお母さんから言われればかえるに決まってる・・・

「いいですよ。」

そうだ。だめに決まってる、おじさん達の顔が見る見る笑顔に変わって・・・え

「お、お母さん？今・・・」

お母さんは振り返って

「いいじゃない！家族が増えるなんて！それにちょうど三階が開いていたし、犬がほしい！ってあなたも言ってたでしょ。」

そっついながらスリッパを用意して新しい家族を中に招き入れている
おかしい。色々おかしい。

「ちよつとまってよ！犬はほしって思ってたし、実際にかえるなら大歓迎だけど・・・」

「ならいいじゃない。」

「犬はいいけど！そういうことじゃなくて！よく見てよ！おかしいでしょう！」

お母さんは犬とおじさんを交互に見て笑顔を浮かべ

「何もおかしくないじゃない。さあ早く入って頂戴。夕飯也多めに作らないと！」

お母さんは忙しいそうに廊下におじさんを案内して言ってしまった
おかしいってなにこの状況！

「・・・お母さん！」

足音ともに廊下の置くから

「買い物にいつてきてくれるー？なべにしましょう！今日は！」
上機嫌だ

「・・・お母さんって・・・」
くう　ん・・・

もう一度叫ぼうとしたときに西郷が可愛い犬の鳴き声で私に話しかけてきた

「落ち着け。お嬢ちゃん。」

「どうやって落ち着けと！？犬はいいけど！犬はいいけど！おじさんまでもって・・・」

「そのほうが都合なんだぜ。お嬢ちゃん。買い物ついでに犬の散歩にいかねえか？」

犬が笑うなんておかしいかもしれないが、すくなくとも西郷は笑った

「・・・お母さんー！買い物ついでに・・・夕、夕散歩さしてくるー！」

「そう？お願いねー！夕口っていい名前よー！！」

私はお財布を受け取りゆつくりと遠回りに買い物のみ知恵と足を進めた

「夕口って、お嬢ちゃん・・・それはあんまりじゃねえかい？」

私は紅いリードを握り

「そう？いい名前じゃん！」
と言い放った

「そうか・・・お前がそう思うならいいが、俺はなんていわれようが西郷だ」

タロは少し不機嫌そうに私の前に言った

「西郷なんていう犬いないと思うよ。いいじゃんか、西郷じゃなくとも、タロも以外にイケてると思う・・・」

ワン！

私は突然の犬の鳴き声にびっくりし立ち止まった

「俺は西郷だ！俺の誇りもある名前だ。お嬢ちゃんなんて呼ぶがかまわないが、俺の名前は西郷だ」

そう私にまっすぐな目で言った

「そっか。でもタロも威厳のある立派な名前なんだよ。気につてくれたらうれしいよ」

「ああ。」

私は歩き出そうと体の向きを変えた

「さて、早く買い物」

歩き出したが、タロは動かなかった

「あれ？どうしたの？」

タロは人のいないドテへと私を引っ張り出した

「タロ？」

無言でぐいぐいと進んでいく

「タロ？・・・」

ものすごい力だ。

「・・・西郷？」

しばらくいくと私と西郷が始めてあったあの、桜の土手にきた

「・・・」

暖かい夕日に染まっていた桜は今は星空の中にひっそりとたたずんでいる

「ねえどうしたのさ？急に？」

私はタロの近くに腰を下ろした

「・・・お嬢ちゃんに一つ聞きたいことがあるんだ」

タロはとても真剣な顔で私の顔を見ようともしせずにいった

「お嬢ちゃんは今からどうするんだ？」

私は不意に顔をぬぐられ多様なかんじに襲われた

「……どうするって……みんなを助けないと。爆弾を止めないと」

私は身をちじめて困った顔を隠した

「それで、どうするんだ？」

「……お父さんを助ける」

二つの白い息が闇に消える

「どうやってやるんだ？」

「それは……千羽にも手伝ってもらって」

静かな夜に犬の声が響く

「手伝ってもらえるのか？そしてどうするんだ？」

私は手を握り

「……ボスに」

顔を上げようとしたとたんにタロが手を軽くかんだ

「いたっ！何する……」

「お嬢ちゃん！今ボスになるとかいおうとしたんじゃないよな」

私は甘噛みされた部分をモウ片方の手で包みタロのほうに体をむきなおした

「そうだよ！私がボスになればマフィアを丸く抑えられる！それで、お父さんも殺されずにみんなも無事でいられ……」

私は立ち上がった

でもそれを押し倒すようにタロは毛を逆立てて私の上につた

『甘えてんじゃねえ！』

ワオォン！

けたたましく遠吠えをした

「西郷……」

「何がボスになってマフィアを治めるだあ！？青臭いガキにいたい何ができる！父親がボスだからマフィアのもんが従うとも思

つてるのか！？はっ！付け上がるのもいい加減にしな！お嬢ちゃん一人の力なんて高が知れてる！自己中心的で！わがままで！いちいちうるさくて！すぐ気にして！うじうじして！触れればすぐ壊れちまいそんなそんな意志で乗りきれれると思ってるのか！お友達ごっこにいつまでも助けを求めてるような奴に！・・・甘えてんじゃねえよ！」

タロ・・・西郷は白息を牙の隙間からはいた

「・・・」

私はそのまま土手に転がり顔に手を当てた

「・・・覚悟・・・したくないよ。本当はいつまでもお友達ごっこしたい。怖いよ」

タロは私のお腹の上に座って

「見てみな。きれいな星空だ。なあ。」

私は目が厚くなってきたのを感じた。ほほを涙が伝った。

「うん・・・」

「泣きたいとけば泣かないと笑えなくなるぜ」

私はその後お腹にぬくもりをかんじながら泣いた

それからお母さんとおじさんが汗をかいて私達を探しに来て怒られたことは明確だ。

でも私はすつきりした笑顔を見せられた

その後土手でみんなで星空を見た

家族が一人と一匹増えました！

甘えてんじゃねえ！（後書き）

長くなりすみません。

これからいよいよ本格的にマフィアとぶつかっていきます。
温かい目をお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0293s/>

スクール ダディー

2011年12月26日21時53分発行